
種蒔く者

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
種蒔く者

【Nコード】
N3056L

【作者名】
Joker

【あらすじ】
二十二世紀、世界は『クイーン』と呼ばれる超高性能電子頭脳により動かされていた。政治、科学、教育などすべての分野で何一つ失敗することなく人類を導いたため、人類は未来を『クイーン』に託すという選択をする。人々は自らの未来について考えることをやめた。そして世界に平和が訪れた。犯罪の激減に戦争の消滅。しかし、それは長くは続かなかった。『クイーン』は突如として世界大戦を始めるように指示。世界は三度大戦の戦火に晒された。それを止めるために人々は立ち上がる。その中には大戦の途中で消滅した

日本ジャパンという国の生き残りがいた。

プロローグ

22世紀、人類はロボットとの共存を選んでいた。

そして、考えることと働くことに疲れた人類は生活の快適化のためにロボットを作り出した。その最高峰と呼ばれたのが『クイーン』と呼ばれる超高性能電子頭脳である。この人工知能は世界を平和に導くために千年先の計画を立てて、それを効果的に実行していくものとしてロボット工学の権威であった秋月幸助博士によって位置づけられた。

人類はこのロボットの指示に従い、日々を暮らしていた。この人工知能についていけば、争いのない、平和な時代が訪れると信じてやまなかったのである。

『クイーン』の預言は全てを的中させた。

ある街で洪水がいつ起きるか、被害を防ぐにはどうすればいいか。何月何日に隕石が地球に降ってくる。対策をどうすればいいか。これらを完璧に成し遂げた。

政治や治安に関しても隠れた犯罪を取り締まる組織の結成、犯罪組織の壊滅。社会保障の充実に汚職の激減。

世界最高の人工知能の功績は数知れなかった。

『クイーン』が全てを取り仕切ってから数年、世界全ての国で生活水準が向上した。そして、治安も良くなった。戦争も全世界で終わった。

これらの功績は世界中で称えられた。人類を新たな世界へ導く者が現れたのだ、と。

人々は次第にこの新しい預言者を信じるようになった。それは時間を経て盲信へと進んだ。何もかもすべて『クイーン』に任せておけばよいと思うようになったのである。

そして人類は考えることをやめた。AI（ここでは人工知能を指す。Artificial Intelligence）の略）を

搭載したロボット（AIロボット）を大量生産し、働くことなく自由なく、暮らせるような社会の実現へと『クイーン』の預言通りに舵を取ったのである。

世界は夢を見た。これで最高の時代がやってくると。人類最高の高みに上ったのであると。

そこに突然下された『クイーン』の指令は100年前に起こった、連邦大戦の再現だった。

人類は困惑した。何故、人類の指導者であり平和の守護者たるものが戦争を起こすように指示を出したのか、と。

大戦は起こり、そして数十年に渡って続いた。地上は荒廃し、人類は大戦前の半分となっていた。それでもまだ『クイーン』は戦争を続けよと告げた。

誰も『クイーン』の思惑は知らない。

そんな時代に、ある青年が『クイーン』の置かれている街、ジェノヴァにやってきた。

プロローグ（後書き）

こんばんは。

私的な都合により一度作品を消してからリメイクしたものを出させていただきました。お気に入り登録していただいた方々には申し訳ありません。

文章や展開でまずかったなと思うところを改めております。お楽しみいただければ幸いです。

それではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第一話：紫電

紫電^{しでん}は世界で知らない者はいない超高性能AIロボット『クイーン』のいる街へと入った。見た目は二十歳前後、鷹のような鋭い目つきが印象的な青年である。総髪に黒い忍び装束のような服を細身の身体に纏っており、背には短刀を背負っていた。このときは別段珍しくもない格好である。何故なら、大戦がまだ続いており、人類は戦いに明け暮れていたのだから。

「ここか」

地図を確認し、短く呟くと青年は市街地にあるビルの地下へと入った。

地下へと続く階段は薄暗い。

階段を下り終えると、コンクリートで囲まれた部屋に男がいる。

「ご苦労さん」

赤い髪を持つ長髪の男が出迎えた。赤い西洋鎧を身に纏った、紫電と同年代に見える青年であった。西欧人らしく鼻が高く、青い瞳を持つ。

「貴様がこのマスターか？」

紫電は無愛想に問うた。マスターとは『クイーン』による支配を倒すためのレジスタンスのリーダーを指す言葉である。紫電はマスターからある依頼を受けていた。

「いいや、俺はただの使い走りさ」

にやりと笑って長髪の青年は答えた。

「マスター、来ましたよ」

だるそうに長髪の青年は声を上げた。奥にある木造の扉がぎちぎちと音を立てて開かれる。

「ご苦労、グレン」

マスターと呼ばれた老年の男はグレンと呼ばれた青年にねぎらいの言葉をかける。頬にある傷と右手首にある銃弾の跡は歴戦の戦士

を思わせる。長い白髪で顔の右半分は覆われている。

「さて」

マスターと呼ばれた老人は紫電に目を向けた。グレンと同じ青い瞳だが、少し濁りがある。

「君のことは調べた。暗殺ギルド所属のハンターだな？」

ハンターとは文字通り狩人を指す。ただし、暗殺ギルドでは人間を含めた全てを『狩る者』という意味合いを持つ。

「元、だ。ギルドは壊滅した」

無愛想に紫電は口を開いた。

「それで用件はなんだ？」

「まあ、そう焦らないでくれたまえ」

老人はタバコをふかした。うまそうにタバコを吸い込むと、わっか状の煙を器用に吐き出した。

「まあ、座りたまえよ」

老人は近くにあった白いソファをすすめた。老人は紫電がそこに腰を下ろしたのを確認すると自らもその対面にあるソファに腰を下ろした。

「さて、仕事の話といこうかね」

「手短に頼む」

「若いのに急いてはいかんぞい。もっとじゃな、落ち着きを」

「……」

紫電は突き刺すような視線を老人に向けた。

「脅しなどワシには効かんよ。まあいい、話そうか。君の仕事だが、

三体の機械兵の抹殺だ」

老人は真剣な目つきになって紫電に言った。

機械兵とは『クイーン』が警備のために作り出した兵隊で、彼女の命令を忠実に実行する。今は『クイーン』を倒そうとする人間の
大敵である。

「以前受け取った手紙にあった内容とは違うが……」

紫電は迷わず訊き返した。

「こやつらを始末せねば『クイーン』に近づくことすらできんのだや」

「了解した。作戦決行はいつだ？」

紫電は問題ないというようにすました顔で答えた。

「おいおい、暗殺者さんよ。アンタ、大丈夫なのか？」

グレンが口を挟んだ。無知を嘲笑うような口調で。

「問題ない。俺が負けるはずがない……！」

その言葉によどみや揺らぎはない。

「グレン、少し下がっておれ。さて、紫電。明日夜十二時に作戦を実行する。今日はひとまず休み、明日朝に作戦会議をするから、それに出て欲しい」

紫電は不服そうに答えた。

「必要ない。俺は貴様らの邪魔にならぬよう行動するし、一人でも充分だ」

老人はしばらく考えていた。数分の沈黙の後、老人は決意したように言った。

「分かった。では、この作戦は君一人で行ってくれ。下手に我々が動いて、レジスタンスの所在が明るみになるのもまずい」

「了解した」

紫電はそれだけ言うとう意されていた部屋へ入っていった。

「どうかね？ 君はあの男をどう見る？」

老人はグレンに尋ねた。

「分かりません。ただ……」

「ただ？」

「底知れぬ力を秘めていると思います」

翌日になると紫電は落ち着いた様子で作戦会議に出席し、無言で作戦の概要を聞いていた。

「眠れたかい？」

グレンが紫電に訊いた。グレンは眠たそうな目をこすっていた。

「まあな、貴様と違って軟弱な生き方はしていない」

グレンの両手に力がこもったが、そのまま何も言わずに立ち去っていった。

街の空が夕闇に染まり、完全な黒になるまで紫電はジェノヴァの地下墓地にいた。地下墓地は整備されていない部分が多く、骸^{むくろ}があちこちに転がっていた。墓地というには大雑把であり、そこは遺体放置の場所に近い様子であった。

紫電は気配を極力殺す。

深夜十二時を告げる鐘がジェノヴァの街に鳴り響く。

紫電は無言で立ち上がると暗闇に消えていった。

ジェノヴァの港には標的の機械兵たちが闊歩^{くわく}していた。

三体とも手にそれぞれの武器を持つ。

槍、剣、そして銃。

船はあれども人の気配はしない。黒い波が押し寄せてくる音が響く。

「さて、始末にかかるか」

紫電は短刀を抜く。

石造りの港から三体の機械兵は小さな漁船へと入った。

それを確認すると、懷から手榴弾を取り出し、船に投げる。

大きな爆音が上がった。

「何者ダ？」

「オノレ、『くいーん』様ニ楯突ク輩カ」

「殺セ」

耳障りな電子音が返ってくる。

船は燃えながら沈み始めた。

火を被りながらロボットが三体出てくる。

「「処刑スル」」

「遺言はそれか。死ね」

一瞬、閃光が走ると機械兵たちは横真っ二つに斬り裂かれていた。

「目標殲滅完了」

紫電が戻るとマスターをはじめとしたレジスタンスのメンバーは

驚愕の表情を浮かべた。

「まさか、あの標的をわずか一夜で撃破してくるとは……」

とりわけ驚いていたのはグレンだった。

「コイツがいれば、『クイーン』を倒すことも出来るんじゃないか」
紫電はそれを聞いて答えた。

「無論だ」

自分を信じるというレベルではない。絶対の自信がそこに垣間見えた。

「では早速次に移ろうかの」

マスターが声を上げた。

「必要ない」

一言で冷たく紫電は返事した。

「これは俺が一人でやる。貴様らはそれを見ていればいい……」

「おい、紫電。お前、敵をなめすぎじゃないのか？」

グレンが紫電に詰め寄った。

「なめる？ 貴様こそ俺を誰だと思っている？」

紫電は冷ややかな眼光をグレンに向けた。

「……暗殺ギルドの一員だろ」

「ふん」

踵を返すと紫電は一人立ち去っていった。

「何じゃ、グレン。あいつの正体をまだ知らなかったのか？」

マスターがグレンに声をかけた。

「知りませんよ。一体何者なんですか」

「まあ、そこに座れ。データを持ってこよう」

マスターはソファを指差した後、自分の部屋へデータを取りに戻った。

数分後、マスターはデータを持って戻ってきた。

「このメモリーファイルを見るといい」

端末に入ったファイルから情報が映し出された。

「これが……紫電……？」

グレンの額には汗がにじみ出ていた。

第一話：紫電（後書き）

こんにちは、Jokerです。

これも書き改めた第一話です。

初期にあったダラダラした展開を消しました。
シンプルイズベスト（？）

というわけで

次回またお会いできることを祈りつつ……

第二話…蠢動

目の前では信じられない光景が映し出されていた。

並み居る敵を斬り払う一人の青年。

人間業とは思えない体術。相手の動きを先読みする鋭い洞察力。

それらを兼ね備えた人間が画面で戦いを繰り広げていた。いや、見る人から見ればそれは一方的な虐殺に見えた。

「これが紫電じゃ」

マスターは静かに言った。

「消滅前の日本^{ジャパン}という国でな、彼は有名な暗殺者じゃった。いや、日本一だったというべきかもしれん」

「それが…紫電ですか」

グレンの体が震える。人の域を超えた人間がいたからだ。画面に映る人間はその動きを見ても、人の皮を被った悪魔に見えた。人を殺すために神が地上に遣わしたのかと思うほどだ。

「紫電というのは通称じゃ。本名ではない。この組織では本名をはじめとして個人情報を守るためにコードネームを暗殺者に与えておったのじゃ」

「消滅前の日本にこんな人間が…」

あの揺るぎない自信の根拠はここにあったのだ。

ところで、日本^{ジャパン}という国は数年前まで存在した東方の島国だった。保守党と改進黨という政党による二大政党制をとっていたが、ある時改進黨が実権を握り北京民主共和国から大量の移民を受け入れ、在日外国人による公務員ギルドの権限掌握による汚職の連鎖などの事態を経て北京民主共和国により併合されてしまった国である。併合といっても、軍事的ではなく当時の首相であった鳩川紀夫^{はとかわのりお}という人物が国の主権を委譲するという異例の形で日本という国は消滅してしまっただのである。今は北京民主共和国日本自治区として存在している。

紫電は与えられた部屋で眠っていた。そこは簡素な家具とベッドが置かれているだけの部屋だった。灰色の壁紙は所々はがれており、部屋自体の老朽化が進んでいることがわかる。

彼が見ているのはいつもの夢。壊滅した日本から追い出されるようにして世界へ飛び出した時の夢を見ていた。

家族を失い、兄弟を失い、国を失った。与えられたのは武器と理不尽だけだった。

紫電が世界へ出た理由は二つあった。一つ目は消滅した日本で己に課した最後の任務が鳩川紀夫の抹殺であり、これを遂行するため二つ目は破壊されつくした祖国を見るに忍びなかったからである。

翌朝になると紫電は何事もなかったかのようにマスターたちの前に姿を現した。

簡単な挨拶を交わすとそれぞれが持ち場に散っていく。

「しばらく出かけてくる。次の準備があるのでな」

それだけ言うと言紫電は出て行った。

「日本へ戻るか……」

行き先は日本。

空路を使い、生まれた国へ戻った。日本はその時、成田空港のみが機能しており、その他は外国勢力に押さえられている状態だった。日本へ戻るとかつての暗殺ギルドがあった場所へ訪れた。そこは既に廃墟となっており、人気を失っていた。瓦礫の山ばかりがそこにあるだけで、近くには民家もない有様だった。

紫電は瓦礫の山から地下への隠し階段を見つけ、そこを降りる。

そこは地下にも関わらず紫色の花が咲き誇る墓地になっていた。

その花は淡い光を放っている。そのため、全くの暗闇であるはずの空間が少しだけライトアップされており、幻想的な雰囲気をもし出していた。

紫電は家族の墓の前に行き、座った。墓の下に埋められていた布に包まれた何かをそっと手に取った。

そして、それを刀と一緒に背負ってから、両手を合わせた。紫電は

日本を離れてからも毎年これが続けていた。

数分間祈りを捧げた後、紫電は突然武器に手をかける。

「……誰だ貴様は」

紫電は背後の気配を感じて殺気を飛ばした。

「僕だよ」

声変わりする前の少年のような、少し高い声だ。

「貴様か」

紫電と同じ黒髪の青年が紫電の背後にいた。肩よりも少し長いストレートの長髪。女性に見える端正な顔立ち、目つきは紫電よりも随分と穏やかだった。そして、紫電と同じ黒装束を細身の身体に纏っている。背中にはその身体に不似合いな太刀。

「奇遇だね」

「白々しい真似をするな」

紫電は殺気を消して言った。

「空港から貴様の気配は感じていた」

「おかしいな。気配殺していたのに」

「だからこそ貴様だと分かったのさ。俺を尾行するのに気配をわざわざ消してする奴など貴様ぐらいしか思いつかん」

「なるほどね」

青年は微笑んで返事した。笑ってはいるが、依然として隙は見せていない。

「で、紫電はどうしてここに？」

「毎年の恒例行事さ」

紫電は祈りを済ませると出口に足を向けた。

「帰る」

「どこに？」

「ジェノヴァだ」

「僕も……」

「くるな」

紫電は青年の言葉を遮る。

「これは俺の仕事だ。貴様は邪魔するな」

目を閉じて冷たくいつものように切り捨てた。

「あっそう。有益な情報あるんだけどなあ。協力させてくれるならあげてもいいんだよ」

「……」

紫電は頭を抱えた。青年の性格を知っているからなのだろうか。

「情報だけ寄越せ」

「駄目。行く」

青年は駄々っ子のように言った。

紫電頭を抱えて帯同を許し、そのままレジスタンスのある街へと戻る。

飛行機の関係で街にたどり着いたのが夜中になってしまっていた。夜中の街並みはそこに住む人々の生活を如実に表す。家々から光がこぼれて、家族が笑う声が聞こえるところや暖かい暖炉の炎が煌々と燃えているところなどがあった。

「俺はここである連中の依頼を受けている。貴様は無関係だからそこへは連れて行けん」

「いいよいいよ。これで充分。ところで情報なんだけどね、君のターゲットは今この街にいるらしいんだよ。何でも、『クイーン』とかいうのに会いに来てるらしい。それから、『クイーン』の設置施設についてなんだけど、嚴重なプロテクトが施されている。誰かがキーを持っているらしいんだけど、それがないと入れないんだ。つまり、それを持つ人物を探し出さないと、あの人工知能は潰せないってわけ」

青年は銃と刀を荷物から取り出す。

「僕も場合によっては手伝うから」

「いらん」

「冷たいなあ。同僚のよしみで仲良くやろうよ」

「メリットがない」

青年は肩をすくめて紫電に背を向け、街へ消えていった。

「厄介な奴に会ったものだ」

紫電はレジスタンスのアジトに戻る。

「今戻った。明日から早速次の段階に移る」

紫電はそれだけ告げると与えられた部屋に引きこもった。

紫電と分かれた後、青年はジェノヴァのホテルに滞在していた。

手元にある潤沢な資金があればこそ出来たことである。

青年は自らの得物である日本刀と銃を取り出し、簡単な整備を行った。これは彼の日課となっていた。

いついかなる時でも戦えるようにとギルドで教わったからである。彼もまた紫電と同様に暗殺者としての徹底的な英才教育を受けた。そして、紫電と同等のレベルの暗殺者にまで上り詰める。ただ、その代償として青年は感情を失ってしまった。躊躇いなく人を殺せるようになり、笑顔で任務を遂行することが出来るようになった。自らの感情をなくしてしまった。

青年は雷電らいでんという名で呼ばれ、心無き暗殺者として知られている。翌日、紫電は昼間に行動を起こした。鳩川を抹殺するためにである。

街中に入り、大使館へと近づいていった。

ジェノヴァにある大使館にターゲットは滞在しているとの情報を掴んだからである。

「何してるのかな、紫電」

からかうような声が紫電の背後から聞こえた。

「貴様、邪魔しにきたのか？」

紫電は雷電をにらみつける。それは並大抵の人間なら恐怖で金縛りにあうほど鋭いものだった。

「違うよ。ほら、協力するって言ったじゃん？」

無邪気に笑って雷電は返事する。人を殺めることを何とも思っていないかのようだ。

「これは俺の任務だ。邪魔するなら貴様から殺す」

「殺されるのは嫌だなあ。じゃあ、僕はあっちで見てるねえ」

雷電は子どものように笑うと近くにあった建物の屋根に跳ぶ。

「ふん」

紫電は静かに身を隠し、ターゲットが現れるのを待った。

小一時間ほどすると鳩川と二人の男が出てきた。腹心の岡崎と小川。共に日本消滅に関わった政治家である。

「……」

紫電は何故か悪寒を感じた。動いた瞬間自分が殺される。そんな気が体中を駆け巡った。そして無言で引き上げた。殺気の主は分からないまま。

「いい判断だよ、紫電。気が乱れているのに任務に当たるのは得策じゃない」

雷電がいつの間にか紫電の前に現れていた。

「余計なお世話だ」

こんな悪寒を感じたのは初めてだった。恐怖というよりも気味が悪い。そんな感覚を体中で紫電は認知していた。

「感情の昂ぶりは危険だからね。特に僕たちにとっては。そんな時にやっても、冷静な判断が出来ずに失敗するだけだよ」

紫電は口をつぐむ。

「ところでさ、紫電。聞きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

「何でそこまでこの任務にこだわるのかなと」

「……貴様には関係ない」

「もしかして両親や家族が殺されたからとか」

「違う」

紫電は顔をそむけた。

「ま、いいか。興味ないし」

「俺は帰るぞ」

紫電は俯いて帰途に着いた。雷電は少し笑って、にぎやかな喧騒の街に消えていく。

紫電が帰るとグレンが出迎えた。

「よお、ご苦労さん」

入り口からすぐのところにあったテーブルに誘導し、コーヒーカップをかちやりと置いた。古びたカップの中には日本茶が淹れられていた。

「……ありがたい」

紫電は礼を述べ、椅子に座る。

「あんたのこと、調べさせてもらったぞ」

「そうか」

紫電は日本茶をうまそうにすすった。

「ジャパニーズなんだな」

紫電はカップを置いた。

「ああ。生き残りだな」

感情を見せる気配はなかった。紫電のいつもの癖である。

「そういえばさ、何故俺たちレジスタンスに？」

紫電は特別な暗殺者であった。単独行動が基本。組織には関わらない。それが何故今頃になってレジスタンスに組するような仕事を引き受けたのかグレンには疑問だった。

特に紫電のような一級の暗殺者は裏社会では知れ渡っており、一般にも情報通ならば知られているといった程度の認知度がある。

「……」

紫電は逡巡した。

「……聞きたいか？」

紫電は視線をグレンに向ける。

「ああ」

「長話になるぞ」

紫電は前置きしてから続ける。

「しばらく前……日本が世界地図上に存在していた頃に戻る。俺は暗殺組織『羅生門』の一員として在籍していた」

紫電は目を閉じて静かに話し出した。

第二話：蠢動（後書き）

コンバンハ、Jokerです。

これもまた書き直したものです。

そういえば伏線張ってあるのにお気付きですか？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第三話：決意

日本滅亡の少し前、鳩川は岡崎を伴って北京民主共和国へ行っていた。

「北京民主共和国首席大統領の指令により、北京民主共和国へ主権を委譲する協議に参りました」

鳩川たちは共和国大統領府へ行き、大統領私室へと歩いた。

大統領府に入ると、がっしりとした体型にダークスーツを着込んだ数百人もの警備員が守る門をくぐる。そして、入り口から敷かれている赤じゅうたんの上を歩いた。

壁にはレオナルド・ダ・ヴィンチの名画『モナリザ』、室内にはミケランジェロの彫刻が並べられており、それらの芸術品が冷たく鳩川たちを出迎える。

私室に入り、周囲を見渡せば、きらびやかな調度品、高麗青磁の壺や高価な美術品など様々なものにより飾り付けられていた。眠り心地のよさそうなベッドがあり、部屋にバスが付いている。部屋の隅には小さなワインセラーまでついていた。

そこに入ると愛想笑いを浮かべて、でっぷりとした体型の男に話しかけた。この男が北京民主共和国を統べる首席大統領であるキムである。

「ご苦勞だった。まあ、夕日新聞や毎朝新聞を味方に引き込めというわしの指示を忠実に守り、よく日本を日本人から解放してくれた。感謝しているぞ」

キムは大統領府の中枢部にある私室でダイヤモンドをちりばめた豪華な椅子にどかりと腰をおろしていた。室内はベージュの壁により彩られており、最新鋭の設備も設置されている。

大統領府は北京民主共和国の首都北京にある国の最高統治機関である。人事院やその他の組織を統括している。灰色の外装の古びた建物の外見とは裏腹に重要な位置づけをもつ組織なのである。

「もったいないお言葉です。日本は日本人だけのものではありません。我々は北京民主共和国の繁栄の為に戦いました。今回の総選挙も彼ら新聞社の報道のおかげで圧勝することができました」

鳩川は笑顔でうやうやしく言った。岡崎も無理に作った笑みを浮かべている。

「さて、主権委譲についてだが……」

キムは脂ぎった顔で、いやらしい笑みを浮かべた。

「まずは沖繩をこちらに譲るということでしょうか？ 過去の大戦の償いという名目を作ればよろう」

「はい。衆議院及び参議院はほぼ我々が掌握していますから反対などさせません。国民が反対したとしても無視すればいいのですから。それに安国神社はブルドーザーで更地にしてジャスコを立てる予定です。北京民主共和国の皆様のために」

「うむ、よく言った」

わははと下品な、だみ声でキムは笑った。

「それから特権についても頼むよ、鳩川君そして岡崎君。おっと、岡崎君は本名であるイエン君といったほうがいいのかな？」

一連の会話を大統領府に忍び込んだ紫電は聞いていた。今回の任務は改進黨のトップの偵察任務。

「危険だな、思った以上に」

紫電は会話を録音し、鳩川や岡崎よりも早く日本に帰り着こうとしていた。

「急がねば……」

焦った矢先のことだった。駆ける両足に力が入った。

「おい、誰だ？」

かすかな音を立てた紫電は何者かに発見された。

「しまった……！」

紫電と似た黒装束の男が紫電の前に現れた。

「悪いが死んでもらう……」

男は日本刀を手に紫電に襲い掛かってきた。同じ暗殺者のようだ。

紫電は切っ先が淡く光る刀を相手に突き刺すように構えた。紫電の師であった零^{ゼロ}から習った構え方である。

「し、侵入者か！」

キムは慌てた。

「ご心配いりません。護衛が始末するでしょう」

鳩川は落ち着いて言った。

「う、うむ……」

紫電と男の武器は互いに甲高い金属音を立てて、ぶつかりあっていた。

「貴様如きに時間をとっている暇はない……！」

紫電は手榴弾をばら撒くと、爆炎に隠れて男の背後に回り、斬りかかった。

男はそれを刀で受け止める。相当な腕を持っているようだ。

「首相！　ここは本国へお逃げください。紫電が相手では分が悪い！」

男は大声で鳩川に知らせた。

「うむ、ここは頼んだぞ。岡崎君、例の暗殺ギルドを潰せ……紫電が敵に回った以上、利用価値はない」

最後は小声で指示を出す。それが組織壊滅の始まりだった。

紫電が男のとの戦いを終えたのは十分後。既に鳩川と岡崎は空港へ着いている頃である。また、キムから紫電抹殺のために大量の兵士が送り込まれており、紫電は生還するために、彼らを倒していかなければならなかった。

数日後、紫電が全ての追っ手を打ち倒して日本に戻った。空港から丸一日休むことなく、走り続けて、ギルド本部へ戻ると、それはなくなっていた。周囲には瓦礫と死体の山があるだけである。しかもあちこちを見渡してみると、銃弾で顔をえぐられた男、刃物で両手両足を切り刻まれた少年、衣服を切り裂かれ、乱暴された後に首を斬られた少女などの物言わぬ体があった。

周囲の色はどす黒い赤一色に染まっている。空は重苦しい灰色の

雨雲によって埋め尽くされている。

「……」

紫電はうなだれて、肩を震わせていた。

「こんな、ことが……こんなことが……」

紫電は暗殺稼業を始めてから初めて涙を流した。これが悲しいという感情なのだと分かった。

「許されていいのか……！ まだ、俺みたいに殺しに殺して後戻り人間じゃなく、未来のある人間を……」

声も震えた。悔しかった。悲しかった。辛かった。そんな感情が紫電に浮かび上がってきた。

しばらくした後、紫電は誰にでもなく呟いた

「殺してやる……これに関係した人間を全て滅ぼしてやる」

紫電は得物を握った。

「これが俺の最後の任務だ……！」

黒の瞳にはかつてないほど怒りがみなぎっていた。

鳩川と岡崎、小川らはその後北京民主共和国から1000万人の移民を受け入れた。結果、日本は無法地帯と化し、在日外国人たちの犯罪は鳩川の友愛政策で許されるという法律が出来上がった。殺人も強姦もすべての犯罪が許され、人権友愛の象徴として鳩川は独裁体制を強めた。

それだけにとどまらない。鳩川らは産業を規制し、伝統産業のみならず重工業や自動車工業を衰退させた。二酸化炭素を50パーセント削減するという愚かな政策を打ち出して、根こそぎ工場を海外に移転させてしまったのである。その結果、日本の技術力低下は日を見るよりも明らかになった。EUは日本が自滅していると嘲笑い、アメリカは鳩川に勝手な暴走をするなど警告したが、もはや手遅れだった。

鳩川らはキムの元であらゆる手を尽くし、祖国を売った。日本人たちを迫害し、在日外国人たちにすべての利権を与えた。政治はやがて日本人の手ではなく、在日外国人しかしてはならないという法

律までもが出来上がり、警察組織も在日外国人の手に落ちた。事実上の主権国家の崩壊であった。

ある夏の日、鳩川のもとに一本の電話が入る。

「鳩川君、私だ。キムだ」

だみ声が聞こえてきた。

「これはこれは首席大統領。何か御用ですか？」

「うむ。日本弱体化はよくやっているようだな」

「はい。産業はぼろぼろ。経済も教育もぼろぼろ。もう立ち上がる術はないでしょう。それに我々は美味しい蜜を吸えていますからね。これもキム首席大統領のおかげでございますよ」

鳩川は笑いながら答えた。

「はっはっは。そうだろうとも。これからは我々は東アジア民主同盟を築いていくのだから。ところで、鳩川君」

「はい、何でしょう？」

「明日、こちらに来れるかね。いや、2週間ほど時間をくれると嬉しいのだが」

「はい、構いません。岡崎と小川がうまくやってくれるでしょう」

鳩川は電話を切るとすぐに北京民主共和国に発った。

政府専用機で北京へと飛ぶ。

飛行機から降りると、北京空港では多くの役人が鳩川を迎え入れた。中には重機関砲などの物々しい装備をした兵士の姿も見える。

「ようこそ、鳩川総理」

「うむ、キム首席大統領は？」

「官邸にてお待ちです」

「ご苦労」

鳩川は空港から車でキムのいる官邸へと向かった。

「来たか、鳩川君」

腹の脂肪を揺らしながらキムが官邸の入り口から現れた。曇天の空にはかすかに光が差していた。

「はい、遅くなりまして」

「いや、かまわんよ。それより、君に紹介したいものがある」

「は？」

「『クイーン』だ。今からイタリアのジェノヴァに行こう。そこで謁見しようじゃないか、世界の預言者であり救世主である『クイーン』に」

鳩川は以前からキムが『クイーン』のお告げに頼って政治を行っている聞いていた。

「いいですな。私も一度拝見したいと思っておりました」

「それから、帰ってきたら日本の解体を急ぐように。『クイーン』のお告げがあったからな。それから日本の東海地方以东は日本自治区、以西は北京民主共和国日本省とする。君は日本自治区の王になりたまえ」

「はい、ありがとうございます。これで私の愛を布教することが出来ます。友愛の架け橋を世界から宇宙へ築きましょう」

「なに、かまわんよ。これからはこの国の一部として共に発展していかうではないか。うははは！」

すぐに鳩川とキムはジェノヴァへ発つ。

イタリア空港に降り立つと、地中海性気候の乾燥した空気が鳩川とキムを出迎えた。

イタリアは夏は乾燥して暑い。そのため、主にオリーブなどの作物が栽培されている。また、ぶどうなどの果樹栽培も有名だ。

空港からは予めキムが手配していた車でジェノヴァへと向かった。都市化は発達したが、中国人がイタリアへと入り込み、地域では中国人がほとんどという地域も今では少なくない。

そのため、中国人の領地がで出来上がっており、ヨーロッパであるはずなのに違和感を覚える景色がそこには存在していた。

ジェノヴァに着くと、大都市として発達しているにも関わらず、そこにはまだ中世時代の面影が残っていた。中世以来の古びた建築様式ががらりと変わったわけではなく、広場には古代ローマ時代のコロッセウムの跡がいまだに存在していたりもする。

ヨーロッパ独特の西からの風が吹く街を歩きながら鳩川はキムに導かれて、『クイーン』のいる場所へとすぐに赴いた。

『クイーン』は当時、ジェノヴァのある教会の地下に置かれていた。

キムは鳩川を連れて、ある教会に入る。そして、その教壇前で何語か分からない暗号を唱えようと、地下室への隠し通路が出現した。「さあ、行こうか。人類を導く空間へと」

キムは恍惚とした表情で鳩川を促した。

鳩川は少し気味悪さを感じながらも、キムに付き従った。

隠し通路はさらに地下へと続く階段であり、そこを二人は歩く。ロウソクの光がかりうじて空間を照らすだけの回廊を抜けると、大きな部屋がそこには作られていた。

そして、そこに『クイーン』はあった。

「我らが救世主よ。お忙しい中、申し訳ありません。是非ご紹介したい人間がおりますので、連れてまいりました」

キムは深々と頭を下げた。巨大な人工知能に向かって。

世界最高の人工知能は巨大な端末に囲まれて置かれている。電子頭脳自体の大きさはさほどない。むしろ人間の脳みそくらいだ。周囲ではすべてコンピューターが背景を作っており、人間味を全く感じない無機質な場所だった。当然、周囲には人はいない。警備用のロボットがいるだけである。

「何デスカ。ソノ人間トイウノハ」

人工音声が返事として返ってきた。

「はい、鳩川という者です。日本自治区を治めさせようかと思っております」

キムは丁寧な言葉を選んで答えた。

「友愛の信奉者、鳩川でございます。お目にかかれて光栄です」

鳩川が機械の脳みそに頭を下げた。

「才前ガ鳩川デスカ。日本ヲ壊滅サセルトイウ我ガ預言ヲヨクゾ成シ遂ゲテクレマシタ。褒メテアゲマシヨウ」

『クイーン』は傲岸不遜な台詞を吐いた。

「ありがとうございます」

「次ノ預言ハマタ指示ヲ出シマス。ソレマデ、日本ヲ徹底的ニ弱体化サセテオクヨウニ」

「はっ。仰せのままに……」

鳩川は何一つ疑うことなく、人工知能の言葉に従った。

この数ヵ月後、日本は主権を北京民主共和国に全面的に譲渡することを衆議院と参議院で決めた。国民による大きな反対運動があったが、改進黨はこれを警察を使って弾圧し、日本は北京民主共和国日本自治区となり、世界から姿を消した。

ここにアジアの先進国として存在した日本という国は歴史上から退場することになったのである。

しかし、主権を取られ、生活を奪われ、外国勢力に蹂躪されながらも日本人はまだ諦めなかった。

この状況を好転させ、再び日本人による日本人のための国を取り戻そうと決意していたのである。

紫電にもこれについての打診がいった。しかし、紫電はこれに協力しようとはしなかった。あくまでも元凶であるものを倒さなければまた悪夢は繰り返されると考えたからである。

紫電は日本から飛び出した。

情報収集を終え、日本壊滅の糸を引いていたのが、かの電子頭脳『クイーン』であったことを知ったからだ。それに加え、組織を潰し、子どもたちを殺した鳩川たちに復讐するために紫電は『クイーン』が現在置かれているジェノヴァへもぐりこんだ。

「本当の元凶を潰さねば何の意味も為さない。俺は『クイーン』を殺す」

第三話：決意（後書き）

こんばんは、Jokerです。

第三話目です。

結構変更しました。

鳩川の壊れ具合をもっと上げたかったのですがそうもいかず。
最初から狂ってたら交渉なんぞ出来ませんし……

というわけで

次回またお会いできることを祈りつつ……

第四話：疑念

「それが日本壊滅のシナリオだったのか」
グレンは驚いていた。

「俺が見たもの限りだがな」
紫電は感情を面に出さずに言う。

「余計な話をしたな。これで俺が奴らを潰すことにこだわるのか分かっただろう？」

「ああ」

「今後は手出しをするな。俺の戦いだ」
グレンと別れた後、紫電は外に出た。

暗い空には光が溢れていた。

そこには自らの存在を主張するように、白く光る星が点在し、瞬きをするように輝いている。

三日月は笑うような形で紫電を見下ろしていた。

視線を空から大地に向ければ、そこには戦火の色が全く感じられない穏やかな世界があった。

家々から漏れてくる団欒の声と温色の電灯。顔をほころばせてはしゃぐ子どもたちの姿。それを見守る両親の姿。

紫電は笑みを浮かべて、そんな風景に見入っていた。

「珍しいね、君が感傷に浸るなんて」

どこからともなく少年のような声がした。紫電にとって、この声は聞きなれたものだ。

「いるなら、とっとと出て来い」

「はいはい」

軽い身のこなしで雷電は紫電の目の前に舞い降りた。相変わらず、その動作には隙と感情が見受けられない。

「お仕事はどうか？」

「貴様には関係ない」

「ふーん、そうですか」

「情報があるなら、さっさと寄越せ」

雷電はにこりとして口を開いた。

「さすが僕のかつてのパートナーだね。実は……鳩川と小川がね、日本人掃討作戦を実行するんだって」

「……何だと」

「日本自治区ではさ、殺人や強姦がいまや当たり前になってるけど、日本人自体を世界から抹殺しようとする一派がいるらしくてさ。小川がそれに乗っちゃったってわけ」

「……詳しく話せ。裏があるだろう」

紫電は目を細めた。

「『クイーン』がらみでね。日本人の抹殺預言をしたから最終的に動くことになったんだ。もっとも、直接的な原因は日本人が鳩川らに対して反乱を起こしたからなんだけどね」

雷電は表情を変えずに言った。

（俺だって人間だ。快感や不快感は少なからず、ある。ところが、こいつにはそんな素振りがほとんど見られない）

人間が意味もなく虐殺されることを淡々と語れる人間はそう多くはない。

紫電はこの男を見て身体がわずかに震えていた。

「分かった。情報はありがたく頂こう」

雷電の話が終わると、紫電は日本へ向かうべく準備を始めることにした。

旧大阪府にある日本自治区統括センターでは鳩川と小川が話し込んでいた。

センターは市街地中心部にある巨大なビルの中に置かれていた。最新鋭の設備が兼ね備えられており、厳重なセキュリティも機能している。この施設は単なる自治区監視用だけではなく、軍事拠点としても作られているため、攻略が難しくなっている。

センターの内外には腕利きの兵士たちが24時間体制で警備を行

っており、鳩川らのいる最重要セクションには何重ものセキュリティを突破しなければ入れないというつくりになっていた。

当然、軍事設備なので室内は灰色の壁に囲まれた殺風景な場所である。どんな時でも、監視カメラが目を配っており、侵入者を発見し次第、警報機が騒ぎ出し、兵士が駆けつけるといふ具合に鉄壁の防御が敷かれている。兵器などの設備は整っているが、その他の設備などは最低限とっていいほどしかない。

「総理、日本人抹殺について異論でも？」

センターの一室で、小川は鳩川と向き合い、論議していた。

小川がヤクザのような、いかつい顔を鳩川に向ける。がっしりとした体躯が威圧感を放った。ダークスーツを着込んでサングラスをかけているせいか、どこかの暴力団の組長にさえ見える。一方、鳩川は細身の体に自信なさげな顔にグレーの上品なスーツに身を包み、こちらはどこかのブルジョワのようだ。

「いや、やりすぎではないかと思うのだよ。何かと日本人どもは最近反乱を起こしていると聞く。これ以上抑えつけては收拾がつかなくなるのではないか？」

鳩川は小川の迫力に押されそうになりながらも、はっきりと答える。

「いえいえ心配には及びません。何となれば、核を打ち込めばいいだけの話。それにジャパニーズは邪魔なのですよ、今となってはね」

小川は邪悪な笑みを浮かべた。

小川は日本名であり、本名は全峰零^{シオン}という満州生まれの外国人である。

歴史の表舞台には出てこないが、外国人参政権を推進し、日本を売り飛ばそうとした急先鋒はこの人物であった。

「日本人は遺伝子的に優れた特性を持つ民族らしいですな。技術、工芸、芸術などに」

「うむ。それで？」

「今や北京民主共和国には邪魔なのです。すべての日本人どもが集

まり、結託して反乱を起こされた日には何が起きるか分かりませんからね。第二次世界大戦が良い例でしょう。ゼロ戦などの優れた戦闘機を発明し、ちっぽけな島国ながら大国相手に善戦した。あのような失敗を犯したくはないのですよ。ですから、世界から日本人を抹殺しようと思っておるのです」

小川は鬼のような目をして言葉を吐き出した。

「それに日本人官僚どもも非常に厄介でしてね。こいつらは頭脳の回転が早すぎる。我々のプロジェクトが見抜かれてしまうかもしれません。現に麻月ら、もと政治家や官僚どもの連合体は何か活動しているようですからな。潰しておくに限りますよ」

鳩川は鼻を鳴らした。

「まあいい。好きなようにやりたまえ。これは小川君に一任しよう」
「ありがとうございます。すべては『クイーン』の指示ですからな」
小川は大股にセンターから出て行った。

「ふん、増長しやがって……」

鳩川は面白くなさそうに呟く。

小川はセンターを出ると、携帯電話を取り出す。密偵への連絡を入れるためだ。

「ああ、私だ。どうだ、監視のほうは？ 何、動き出したと？ まあいい。とにかく、事を荒立てぬように見張れ」

一分ほどの会話の後、小川は電話を切った。

それから北京民主共和国政府用のタクシーを呼ぶと

「関西シナ空港へ行け」

と横柄に運転手に告げた。

紫電は雷電から日本人抹殺計画についての知らせを受けた後、すぐに調べを進めた。

日本に渡り、政府機関に潜入する。小川ともう一人、この計画を進めているところまで分かった。

「決行は明日未明みたいだね」

破壊されつくした日本の街並みを見ながら、雷電は紫電に報告し

た。抑揚の無い口調は感情を感じさせない。まるで機械のような恐ろしさを備えていた。

「そうか」

紫電は荒れ果てた田畑やぼろぼろのビルディング、古びて使われなくなった駅舎などを悲しそうに目を細めて見つめていた。

夕焼け空が街の寂寥感をさらに強くしているように見えた。

『羅生門』は日本に本部を置く暗殺組織だが、構成員は必ずしも日本人だとは限らない。世界各国から能力のある者を受け入れて、育成し、一流の暗殺者に育て上げる組織となっていたからだ。

紫電は両手に力を入れる。激情が今の紫電を突き動かす唯一の原動力になっていることに本人はまだ気付いていない。

「大丈夫だよ、紫電」

人形のように整った顔で雷電は言った。

「僕たちがいれば、普通の軍隊なんて敵じゃないはずだよ」

確かに、紫電たちは一般人とは比べものにならない体力や臂力を持つ。それでも、絶対的な数の前には無力である。

「今日は休むとするか」

雷電が偵察に行くと言って別れると、紫電はぼやいて廃ビルの屋上に登って、一人眠りについた。

日付が替わる頃に紫電は目を覚ます。

付近に物音はない。人の気配もない。敵が動く気配が感じられなかった。

「おかしい。何故、奴らは行動を起こさない？　それとも、起こせないのか」

紫電が思案していると、雷電が紫電の前に降り立った。右手には何かを掴んでいる。

「その通りさ」

雷電が掴んでいたのは岡崎の首だった。

「貴様……？」

「説明は今からするよ」

雷電は荷物を放り投げた。それはごとりと鈍い音を立てて転がった。岡崎の目は恐怖と憎悪で今にも食いつきそうなほど開かれていた。

「何故、貴様はこんなものを持ってきた」

「まあまあ、いいから。こいつには僕の行動を見破られたからね。生かしておく道理はない」

綺麗な顔は歪みもせず、人殺しが日課であるかのように笑顔で言う。

「……（あの雷電の行動が敵方に漏れた？）」

同じ暗殺稼業の者ならともかく、一般人に見破られるほど未熟ではない。それとも、敵方に優れた同業者がいるのだろうか。

「それで、日本自治区統治機構は混乱に陥ってるのさ。小川も鳩川も今はそれを抑えるので精一杯ってこと。これで時間が稼げただろう？」

確かに紫電にとってはやりやすくなり、『クイーン』の手がかりもつかめるかもしれない。何より、敵への対策が出来る時間を得たのは大きい。

「何故だ？」

「ん？」

「何故、貴様ほどの者が失態を犯した？」

「やだな、僕だって人間なんだからさ、失敗くらいするよ」

雷電は、あははと陽気に笑って答えていた。

「俺たちみたいなのがいたのか？」

「いいや、いなかったよ」

「ふん、まあいい。なら、次の手を打つまでだ」

紫電は天を仰ぐ。

第四話：疑念（後書き）

こんばんは、黄泉月です。

これも加筆と一部削除、修正を行いました。

多分以前よりは読みやすくなっているはず（？）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第五話：計画

紫電は暗闇でぼんやりと空を眺めていた。

「何故、しくじったのだろうか。何か理由があるのか」

紫電は迷いを振り切るように頭を振り、一旦引き上げることにした。

「僕は別の用事があるから、もう行くよ」

「好きにするがいい」

紫電は雷電を見送ると、ジェノヴァに戻ることにした。

小川はその頃、北京民主共和国のキムと会談していた。

「日本人どもが最近ちよろちよろとしておりましてな。キム大統領のお力で何とかしてもらいたいのですが」

小川はいかつい顔を前面に出してキムに請願した。

「分かっておるよ。ただ、男どもは虐殺してもかまわんが、日本人の女は高く売れるからな。大事な商品として出来るだけ傷つけずに捕獲したいものだ」

ぐふふと気味の悪い笑みを浮かべてキムは答える。

「日本人の女は北京民主共和国に渡しますので、近日中に日本自治区にいる日本人どもの掃討作戦を実行していただけますかな？ どうやら紫電が暗躍しているようなのです」

「紫電？ ああ、日本の暗殺組織のねずみか。放っておいてもいいのではないか。たった一匹で何が出来る？」

「侮ってはなりません。やつは一流の暗殺者であります。いつどこから狙っているか分かったものではありませんからな」

「ふん。精々気をつけるところでしょう。ところで、草からは何も無いのかね」

草というのはいわゆるスパイのことを指す。

「岡崎を始末しました」

「ほう、君たちの腹心ではないのかね？」

「使えぬバカは始末するのがいいのです。安国神社をブルドーザーで更地にしたまではいいんですがね。朝鮮連王国と秘密取引をしていたのですよ。ジャスコの進出と引き換えに、我らの計画の情報を漏らしていたのです」

キムの顔が歪んだ。

「それはまずいな。確か、ジョンセン書記長が関係していたな。それにプロジェクトⅡノアにも岡崎は関係していたのではないか？」

「はい。ノア計画は『クイーン』の最も重要な計画のひとつです。これだけは遂行せねばなりません。我々が世界の支配者となるために」

「ほう。君は日本を売るだけではなく世界までも手に入れようとするのかね。プロジェクトⅡノアは漏れていないんだろうな？」

「はい。これだけは漏れていません。鳩川と私、そしてあなたの三名しか世界でこの計画を知りうるものはいません」

「よろしい。引き続き、君の仕事に専念するように」

ところ変わって、ジェノヴァ。

紫電は飛行機で日本からジェノヴァに着いた。

レジスタンス本部に戻るとグレンが慌てて紫電に駆け寄る。

「バグダッドが原因不明の大洪水に襲われた。そして、その後、北京民主共和国軍に制圧された」

紫電は首をかしげる。

「何故だ？」

「分からない。突然の行動だ。それも世界各地で同時多発的に起こっている。バグダッドの他にはロシアのレニングラード、アメリカのヒューストン、ブラジルのリオデジャネイロ、そしてヴェネツィアで起こった」

「情報が足らんな。集まり次第動く」

紫電はそれだけ言うと、身体を手近にあった椅子に投げ出した。相変わらず、表情は変えない。

「いいのかよ、それで。もしかしたら手遅れになるかもしれないん

だぞ。このイタリアだって、日本の二の舞になるかもしれないんだ！」

グレンは早口でまくし立てた。

「闇雲に動いたところで返り討ちにあうだけだ。敵方には老獪な小川がいる。鳩川だけならどうとでも出来ようが、こいつがいる限りは下手に身動きせんほうがいい」

グレンは何か言いかけて口を閉ざした。

「それに俺はイタリアなどに興味はない。俺の願いはただ一つ。奴らを殺すことだけだ」

「そうか。お前はジャパニーズだもんな」

紫電は視線をグレンに向け

「そうだ。この復讐は俺のものだ」とだけ呟く。

そして、椅子から立ち上がるとあてがわれた自室へと入っていた。

小川はキムと共に『クイーン』に謁見をしに行っていた。

「鳩川君には見せたが、このお方が『クイーン』だ。直接お目にかかるのは初めてだな」

「はい」

「オ前ガ、小川デスカ」

耳障りな電子音が発せられた。四方八方が機械で囲まれた空間に『クイーン』は置かれていた。

「はい。お目にかかれて光栄でございます」

「下手ナ事ハ企マヌコトデス。オ前ガ、のあ計画ヲ利用シヨウトシテイル事ハ分カッテイマス」

「とんでもない。私は『クイーン』の意思に従い、理想の世界を作るべく動いております。私利私欲などではありません！」

小川は声を震わせて、大声で吠える。

そこにキムが割って入った。

「まあまあ、小川君。『クイーン』よ、プロジェクトⅡノアは順調に進んでおります。次はニューデリーとアテネについて実行します。

ところで、そろそろプロジェクトノアのねらいについて教えていただけませんか？」

「愚かな人間ドモラスベテ消スタメデス。世界ハ私が選ンダ人類シカ生キルコトヲ許サナイ」

この時『クイーン』が何を考えていたのかは知る由もない。この計画にはまだ、あることが隠されていることに二人は気付いていない。

「偉大なる指導者よ、引き続き我々は任務にあたります」

二人は命を持たぬ預言者に頭を下げると、その場から出て行った。

「小川君」

「はい」

「日本人抹殺計画だが、君に一任しよう。好きなようにしたまえ。我が北京民主共和国の軍隊を貸し与えよう」

「ありがとうございます。では、東京エリアから掃討にかかります」

「うむ。くれぐれも『商品』にはあまり傷をつけんようにな」

秘密裏に進められた日本人掃討作戦は小川の指示のもと実行された。紫電はこれが起こるまで、このことに気付かず、小川の作戦は成功するかのように思われた。

ある隻腕の男が現れるまでは。

第五話：計画（後書き）

こんばんは、J o k e rです。

連続での投稿です。

一部修正、加筆及び削除して出しました。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第六話：隻腕

東京の廃ビルで小さな悲鳴がこだましている。

「たたたた、助けて……」

けげばけげしい化粧をし、豪華なドレスを着た老婆に隻腕の男が銃を向ける。

隻腕の男の左腕、肘から下は銃が取り付けられていた。

ビルの窓から漏れる陽光が男の逞しい二つの腕を映し出している。
「くたばれ、このブタが！」

白いシャツの上に着ている青の軍用ジャケットとだぶついた迷彩柄のズボンが風に揺れる。男は息を吸い込むと、怒声を上げた。

「てめえは俺の家族をてめえの利権のためだけに、死刑にしやがった！ てめえは確か千崎^{せんざき}法務大臣サマだったな。てめえは日本で誰にも裁けなかった。だから、俺が今、代わりに裁いてやる」

「あ、あ、あ、あれは間違いだったのよ。朝鮮連王国拉致テロリストを釈放したのも、日本人どもを弾圧したのも、鳩川総理の脱税事件を指揮権発動して無罪にしたのも、ちよつとした出来心だったのよ！」

醜く怯えながら、千崎は懇願した。

「命だけは助けて」

「遺言はそれだけか？ クタバレ！」

男は銃を千崎の額に突きつけた。

「あひい……」

「今まで散々、俺たちや日本人を殺戮してきただろ？ もう充分神様気取りでこの世を楽しんだんじゃないかねえのか。てめえは存在してるだけで害悪なんだよ。とつとと逝け」

男が弾丸を千崎に叩き込もうとした瞬間だった。

男の後ろで複数の足音がする。

「ンだ？」

日焼けした彫りの深い顔で後ろを振り向いた。頭の後ろで束ねている金色の長髪が肩の辺りで揺れる。

「いたぞ、千崎元法務大臣だ。保護しろ」

北京民主共和国兵が数人マシンガンを持って駆け寄ってくる。

「おいおい、東京に何でこのクソ野郎どもがいやがるんだ？」

「ここ、この男が最近日本自治区で活動しているテロリストよ。殺してちょうだい！」

金切り声で千崎が叫ぶと、兵はマシンガンを男に向けた。

「おいおい、腐れブタ。てめえ、今の状況分かってんのか？ 俺がちよいと弾をぶち込むだけで、逝っちゃうんだぜ？ それとも爆薬で焼きブタになるのがお好みか？」

男は大きな声で吠えた。

「てめえら、このブタの命が惜しかったら、そこから消えろ。なあに、殺しゃしねえよ。今は、な」

男は千崎の左耳を撃ち抜いた。

「ひぎゃあ！」

千崎は震え上がり、涙を流して兵たちに命令した。

「ここ、ここはこの男の言うとおりにしてちょうだい。わわ、私を死なせるようなことがあったら、あのお方がお前たちを死刑にするんだよ」

兵たちは唾を吐くと、踵を返して去っていった。

「おいおい、随分と度胸がねえんだな。安心しな。てめえはまだ殺さねえよ」

男は嘲笑い、地面にへたり込む千崎を見下ろした。

「てめえがクズだの何だのとほざいてた野郎に見下される気分はどうだ？ 最高にハイってヤツだろ？」

男は躊躇なく千崎の両足に弾丸をぶち込むと、痛みに叫び、のたうち回る声をBGMに壊れた窓から外を見た。北京民主共和国の兵たちがぞろぞろと街中を闊歩している。

「おい、ブタ」

男は静かに問うた。

「ここに紫電とかいうアサシンがいるのか？ 確か野郎はジャパニーズだとか聞いたが」

「わ、分らない」

「隠しやがったら、てめえの心臓ブチ抜くぞ？」

「ほ、本当に知らないのよ！」

男は鼻で笑うと、再び窓の外を見た。

紫電が小川の東京での日本人掃討作戦を知って駆けつけると、そこには予期せぬ光景が映し出されていた。何故か、北京民主共和国の兵たちの死体があちこちに転がっている。それらには銃で撃ち抜かれた痕があった。

逆に日本人の死体はほぼない。

紫電は思案顔になると、廃ビルの乱立している街を歩き回る。

太陽は既に沈みかけて、オレンジ色の光を放っていた。

「アンタが紫電か？」

隻腕の男が紫電に話しかけた。右腕で気絶した千崎を担ぎ上げている。

「貴様は誰だ」

紫電は背中にある忍者刀に手をかけた。

「警戒するんじゃないよ、ジャパン一のアサシンさんよ」

「貴様が味方だという保証はない」

「ごもっともだ」

男はくつくつと笑うと

「俺はガレス。ガレスⅡダイン、アメリカンだ」と自己紹介した。

紫電はそれを聞いて、刀から手を放す。

「それで？ そのアメリカ人が東京に何の用だ？」

「このブタに用事があったんでな」

ガレスは『荷物』を放り投げた。

『荷物』はしばらくうめいた後、すぐにまた気絶した。

「まさかと思うが、そこかしこにある死体はすべて貴様が殺^やったも

のか？」

紫電から鋭い視線がガレスの左腕に注がれた。

「ああ。あまりにハエが多くて面倒くせえから、最後はブタを人質にして追っ払ったがな」

「そうか、礼を言う。おかげで日本人掃討作戦は一時的とはいえ、失敗させることが出来た」

そして、ガレスに頭を下げた。

「礼なんかいらねえよ。俺はただ、このブタを殺したくて来ただけなんだからな。偶然そこで騒動が起こってたから、助けてやっただけさ」

「結果として、助けられたことには変わりはない」

ガレスは近くにあった瓦礫に腰を下ろす。

「紫電、アンタは何故戦っている？」

「俺がそうしたいから、だ」

紫電も瓦礫に腰を下ろした。

「今世界の人間は、考えることをやめている。全て、機械の脳味噌に任せてな」

「『クイーン』か」

表情を変えず淡々と言葉を綴る。

「だから、人間が人間として生きるために戦っている」

「そうかい」

「だが、実際は俺も貴様と同じ。『クイーン』を殺す任務があるからだ。いや、俺自身が殺したいからだ。結局、誰かのためとか言いつつも結局俺は俺のためだけでしか生きられないのかもしれないかもしれん」

ガレスは苦笑すると

「いいんじゃないか、それで。人間なんてエゴの塊なんだ。それでいい。それよりも、だ」と励ます。

「何だ？」

「アンタ何歳？」

「二十四」

「老けて見える」

「ほっとけ。貴様はオッサンに見えるがな」

「俺はまだ三十だ。オッサンじゃねえよ」

「俺からすれば充分オッサンだ」

二人は他愛もない会話をして笑いあった。

「アンタ気に入ったよ。任務とやらに俺も混ぜろ」

「足手まといになれば容赦なく斬り捨てるぞ」

「上等だ！」

隻腕の男は左腕を撫でる。

「頼むぜ、相棒」

二人は動き出した。それぞれに目標を持って。

第六話：隻腕（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これも微修正しました。

ガレスは私のお気に入りキャラでもあります。
詳しくは活動報告にて。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第七話：思考

紫電とガレスは千崎を連れて、日本自治区東京エリアを訪れた。

「さてと、どうするかな」

「貴様の『荷物』はどうする？」

「とりあえず、人質としてとっておくか」

「で、次の計画は？」

「ない。連中の動きが分かればいいのだがな」

死体の溢れた街で二人はしばらく歩き続けた。

同時刻、小川とキムは北京民主共和国大統領府で会談していた。

「次の標的は大阪ですか？」

小川は顔をしかめてキムに問う。

「うむ。『クイーン』じきじきの指令だ。プロジェクトⅡノアを発動する」

「しかし、大阪は北京民主共和国が実質統治している場所。そこに洪水を起こして何が……？」

「我々が考えることではない。偉大なる預言者に任せておけばいいのだ。国民どもが死のうが問題ない。あそこにいるのは日本人が多いのだからな」

「はあ。どうも、キム首席総長におかれましては『クイーン』に操られていると思うのですが」

小川は露骨に嫌味を言った。

「何かね？ 『クイーン』が間違うとも思うのか？」

「いえ。間違うとか間違わないとかの問題ではないのです。この計画は我々が世界を掌握するためのものでしょう。それに『クイーン』が介入するのは構いません。世界の指導者ですから。問題はそこではなく、意見が流されておるのではと申しているのです」

キムは鼻で笑う。

「ふん。我々が判断するよりも間違いはないだろう」

「そうですか……」

小川は会談の後、キムのもとを辞去すると、目を細めてほくそえんだ。

紫電はこれまでの経緯や情報をガレスに与えていた。

「ほう。面白えじゃねえか」

ガレスは寧猛な瞳を輝かせて、東京のおんぼろホテルの一室で紫電の話聞き入っている。

部屋の白の壁紙は所々はがれ、エアコンは壊れている。安っぽいベッドとソファがそれぞれ一つずつあるだけの簡素な部屋だった。

時間は夕刻。太陽は真っ赤に染まり、地平線の彼方へ帰ろうとしている。

「以上だ。不自然な洪水が起こっている。この後に何故か各地を北京民主共和国が侵略している」

無表情で説明を終えると紫電はため息をついた。

「こっちの動きは連中に筒抜けってこたあ、ねえよな？」

左腕につけられた鋼鉄を撫でながら、問いかけた。

「何故そう思う？」

「勘かな。昔の」

「それだけか？」

「情報が不自然に的確なところだな、強いて言えば」

「何だと？」

少し語気を強める。

「アンタの相手は何故そこまで相手方の情報に精通している？ アンタは日本一の、いや世界でも有数のアサシンだ。アメリカでも紫電って名前は恐れられてたんだぜ？ そのアサシン様が簡単に得られない情報を何故、アンタの相棒は入手できたのか？」

紫電の顔はこわばっていた。

「雷電は元々諜報能力にも優れたヤツだ。別に不自然では……」

「ま、アンタがそう思うんならいいんだけどな」

ガレスは空を見上げて、タバコに火をつけた。そして、四肢を乱

暴にソファに放り出して、眠りについた。紫電も続いて、ベッドの上で身体を休めた。

数日後、二人は大阪が謎の洪水に襲われたことを日本人の生き残りから耳にした。

「次は大阪か。この前はヴェネツィアだったな」

紫電はベッドに座って、俯いた。

「行こうぜ。何か分かるかもしれない」

「そうだな」

のろのろと身体を持ち上げた。

大阪にはアカヒ新聞本社がある。40階建ての円筒形の巨大なビルが大阪市内の中心部にあるのである。これは大阪エリアのシンボルとなり、同時に北京民主共和国の広告塔としても機能している。

北京民主共和国に都合のいい情報のみを流し、それ以外の情報は完全にシャットアウトする。いわゆる、情報統制を行っている機関でもあった。

アカヒ新聞社は日本滅亡の数年前から政府の支援を受けて急激に伸びてきた会社であり、当時の日本のメディアを毎朝新聞とともに牛耳っていた。

社長の赤山は鳩川や小川とつながりのある人物で、改進黨の積極的支持者でもあった。そのため、メディアは自律党の麻川らを誹謗中傷する記事を全国に発信し、時間をかけて改進黨が政権を握り、鳩川らの独裁と自らの安泰を求めた。

「鳩川様。友愛の勝利ですな」

赤山はぎょろりとした目を鳩川に向けた。

「うむ。我が愛は憲法など物ともしないのだ」

赤山は広い額を撫でながら

「ところで、日本自治区のジャパニーズどもは最近新聞を取らなくなってしまったからね。我々アカヒの収入が減っているのです。何とかありませんか」と相談した。

鳩川は虚ろな目を空に向ける。

「そうだなあ。ボクの過去の犯罪歴データを抹消しておいてくれな
いかな？　ボク、国の仕組みとかよく分からないからさ。そしたら、
年間500億円支援してあげるよ」

「かしこまりました」

「それからさ、支持率の捏造も頼むよ。ボク、演説とか法律とか分
からないからさ」

赤山は紺色のスーツについた埃を払いながら、引きつった笑顔を
鳩川に向けた。

「鳩川様、この間雇った男ですが、なかなかに使えます」

「そうなのか？　最近は紫電が暗躍しているらしいし、東京で物騒
なテロリストがいるらしいし、うっとおしいなあ。さっさと友愛^{こう}し
ちゃってよ」

「はい。さすがに紫電といえども、あの男の前では無力でしょう。

何せ、狙撃の達人なのですから。時代遅れの刀など役に立ちません」

赤山がベルを鳴らすと、一人の青年が入ってきた。

真っ赤な髪に褐色の肌、瞳の色はダークブラウン。黒のシャツの
上に茶色の皮ジャケット、青のジーンズというラフな格好だ。靴は
機動力を追求した白と青のスニーカー。

鼻が高く、目は大きい。整った顔立ちの青年だった。

「鳩川様、彼がその男です。ジョーカーといえます」

ジョーカーと呼ばれた青年は一礼した。細い腕には似合わない大
きなライフルが抱えられている。

「ほう。ボクの用心棒くらいには使えそうだな。どうだ、ボクの下
で働かないか？」

青年は大声で嘲笑した。

「ふざけるなよ、スポンジ脳みそ野郎が！　俺は俺のやり方でやる。
部外者は脱税でもして、金勘定してろ。俺の仕事は邪魔させない」

赤山は慌てて、鳩川に詫げる。

「すみません、口が悪いもので。ジョーカー、このお方は日本自治
王となる鳩川紀夫様だ。無礼は許さんぞ」

青年は悪びれずに口を開いた。

「無礼？ こいつが麻月のような名将なら別に笑ったりしませんよ。愛だの何だのと訳の分からんことをほざいてて、尊敬に値しないと思ったからバカにただけですよ」

「それがいかんだ。いいかね。麻月らは敗れたのだ。歴史の敗者だ。鳩川様は歴史の勝者、友愛の伝道師なのだ。そして、これからの世界を『クイーン』とともに動かしていくお方だ」

赤山は真面目くさった顔でジョーカーに諭したが、青年はそれを聞き入れなかった。

「『クイーン』？ 歴史の勝者？ 関係ないね」

青年は息を吸い込んだ。

「悪いが、俺がJ O K E Rだ。さてと、引き続き紫電の捜査に当たります」

「分かった」

赤山は鳩川の方を向く。

「鳩川様、この男に任せておけば大丈夫です。どうか、まずはご自身のお仕事を」

「うむ。ボクは小川とは違う。宇宙の支配者になるんだからな！」

鳩川の目はぎらぎらと不気味に光っていた。

「紫電は今東京にいるらしい。しばらくは日本にいますよ。俺の愛銃もそろそろ火を吹きたい頃ですから」

ジョーカーは肩にかかるくらいにまでのびた髪を翻して、二人の前から去っていった。

第七話：思考（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ここはほとんど修正なし。

鳩川のクレイジーっぷりがちょっと足りないか（?）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第八話：銃士

紫電とガレスは国営鉄道大阪駅に降り立った。

無愛想な駅員に見送られ、大阪の街に入る。

「気を締めてかれ」

紫電は短く、鋭くガレスに言った。

「おうよ」

数分も歩かないうちに街の惨状が目の前に現れた。地面は水でえぐられ、商店街は施設ごと破壊され、人気を感じない。

「ゴーストタウンかよ」

突如、銃声が響いた。紫電とガレスは音の方向に身体を向ける。

「ようこそ、世界の終点へ」

褐色の肌を持つ青年が壊れた店の中から現れた。

「この街は『クイーン』とかいう脳みその命令で潰される」

「貴様は何者だ？」

紫電は背中への刀に手をかけた。

「俺はジョーカー。お前の命を撃ち砕く男だ」

長い赤髪が風に揺れる。同時に巨大な銃を紫電に向けた。

「と思ったんだが、赤山のオヤジの思うがままに動かされるのは癪だ。今日は挨拶だけさ。次回からは隙あらば、コイツで狙撃するか
ら精々用心するんだな」

ジョーカーは得物の銃をこんこんと叩いてみせる。

「赤山、というのはアカヒ新聞の総帥だったか？」

ガレスが二人の中に割って入った。

「ああ、そうだよ。鳩川紀夫と一緒に、この国を壊滅させたS級戦犯の一人さ。ま、今では小川とかと裏で結託して、北京民主共和国の広報新聞社に成り下がってるけどね」

からからとジョーカーは笑って答える。

「アンタは、ウィーゲル民族の生き残りだろ」

その言葉にジョーカーはわずかに身体を震わせた。

「どこで知った？」

「その褐色の肌さ」

「ふん、博識だな。それで？」

「北京民主共和国に滅ぼされた民族であるアンタが何故、そいつらの走狗のアカヒに味方するんだ？」

ジョーカーはそれを聞いて嘲笑う。高い声で。

「敵か味方か。そんなの関係ないね。俺は歴史に従順に生きるつもりは全くないし、誰かの思い通りに動くつもりも全くない！」

大きな声でジョーカーは言葉を紡ぎ続ける。

「数年前の日本では麻月とかいう有能な政治家がマスメディアによって、捏造報道され、無理やり退陣に追い込まれた。その結果出来上がったのが、鳩川とかいうスポンジ頭の世界史上稀にみる、お子様政権だった。それでも、メディアは金を貰っている所為もあるんだろうが、必死に持ち上げた。そして、国民を洗脳していった。気付けば、日本は壊滅し、北京民主共和国日本自治区になっていた」

一旦ここで呼吸を整えた。

「俺は歴史の流れを狂わせるために投じられた一石だ。だから、今の友愛バカを助けるつもりも、アカヒの赤山の指示通りに動くつもりもない」

紫電は静かに聞いた。

「貴様は復讐を考えたことはないのか？」

「ないね」

一秒もしないうちに答えが返ってきた。

「それは俺の願いじゃない。だが」

ジョーカーは愛銃を天に掲げ、引き金を引いた。鼓膜をつんざく銃声が誰もいない街に響き渡る。

「俺はお前を倒すために今はいる。それだけは忘れるな」

「貴様は人の思い通りに動くのが嫌いなものではなかったのか？」

「そうだ。正直、鳩川や小川では今のお前は抑えきれない。だから、

俺がお前を倒すのさ。『クイーン』とかいうのもそう宣言してたしな、キムとかいうデブにだが」

「よかろう、いつでもかかってくるがいい」

紫電は口元に笑みを浮かべて告げる。

「ただし、相手を殺すというのなら、相手に殺される覚悟もしておけ。貴様が俺を殺すというのなら、俺は貴様を殺すつもりで動く」
鋭い視線をジョーカーに放った。

「いい殺気だ」

「ところで、貴様は『クイーン』に会ったことがあるのか？」

紫電は刀から完全に手を離れた。

「ああ、あるよ。一年ほど前だけだな」

「詳しい話を聞きたい」

瞳は穏やかなものに戻っていた。そして、口調も。

「俺はキムとかいうブタ野郎の下で仕事をしていた時期があった。その頃、一度だけ護衛も兼ねてジェノヴァに行ったことがある。そこで会ったんだ」

「何故入れた？ 『クイーン』のいる空間に入るには『鍵』が必要という話だが」

紫電は両目を瞑って、腕を組む。

「お前に似た黒装束の男が『鍵』だった」

紫電ははっと両目を開いた。

身体は震えた。齒はかちかちと音を立てている。両足は少し痙攣している。

「そうだったのか」

一筋の涙が頬から落ちた。そして、それは誰にも分からなかった。

第八話：銃士（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これも修正して再投稿します。

ジョーカーの口調が第二部と異なっていたので。

ではまたお会いできることを祈りつつ……

第九話：反逆

雷電は『クイーン』の前にいた。

「今回のお告げは？」

女性と見紛う、整った顔が無表情なものになる。

「鳩川ハソロソロ用済ミデス。ソレニ、我が計画ニ反旗ヲ翻ス可能性モアリマス。消シナサイ」

電子音声が空間内に響き渡った。

「偉大なる指導者よ、仰せのままに」

雷電は頭をたれる。

「岡崎ヲ消シタ時モソウデシタガ、行動ニ乱レガアリマス。気ヲ付ケナサイ」

「はっ」

『クイーン』のいる空間から去って、雷電はジェノヴァの街の雑踏に消えていった。

「キム首席総長、そろそろですぞ。我々北京民族の世界統一が間近になる」

関西シナ空港にある巨大な爆撃機の一室で小川は軍服を着てキムと話し込んでいた。

「うむうむ」

キムは目を閉じて、頷くばかり。

「今度は歴史を人間が取り戻さねばなりません。我々選ばれた神聖なる人間のみが生きることが許される、ニダ思想のもとに」

「……これまでご苦労だった」

キムは突然ダークスーツのポケットから小型の拳銃を取り出すと、小川の額に突きつけた。

「何のおつもりですか？」

小川の額に脂汗が浮かぶ。

「君の役目はもう終わりだ。よくやってくれたよ。日本を売り、天

皇を殺し、国民を虐げ、我々北京民主共和国のために働いてくれた」
「な、何故私が？」

「君は売国者すぎる。我々の秘密を握るのは君だけだ。つまり、君を消せば安心というわけだ。これをネタに強請^{ゆす}られることもなくなるからね」

小川はわなわなと震えた。

「そんな、私は全てキム首席総長のために！ 尽くしてきたというのに！」

「芝居はもういい。君は役目を終えたのだ。滅びるがいい」

小川は目を細めて口元をゆがめる。

「ぐふふ、それで私を殺すつもりですか？ アンタはいつも一手遅いんですよ」

小川が指を鳴らすと北京民主共和国兵がどかどかと押し入り、キムにマシンガンをつきつけた。

「お前たち、これは何の真似だ？」

「首席総長、アンタが機械の脳みそに従い続けるとした時からこうなるとは分かっていましたよ。考えることを放棄した能無しが考えることといえば、奴隷のように惨めに従うだけですからなあ」

再び小川が指を鳴らすと、マシンガンが火を吹き、キムの手にあった拳銃を弾き飛ばした。

「貴様、偉大なる指導者を愚弄するか」

「人間の歴史は人間のものです。機械ごときに人間の歴史は作ってもらいたくないのですよ」

小川は傲然とキムをにらみつけた。

「それに、人民どももアンタのような太ったブタに支配されるよりは獐猛な鰐に支配されたほうがいいでしょうからな。何、心配ありません。北京民主共和国は『クイーン』による支配から脱却し、世界を手中に収めてみせます。そろそろ、老害の出番は終わりです」

腹の底から笑う。

対照的にキムは齒軋りし、ひざをついた。

「最初から画策していたのか？」

震えた声を絞り出す。

「もちろんです。ノア計画に従って世界に北京民主共和国軍を配置することができました。軍事力での支配では我が国に勝る国はアメリカ連邦くらいのものでしょう。ですが、アメリカにもノア計画の魔手が伸びていますからな。内部はガタガタ、戦争に持ち込めば勝てますよ」

小川はキムの落とした拳銃を拾う。そして、それをキムの脂ぎった額に突きつけ、引き金に指をあてる。

「さて、もういいでしょう」

「し、神罰が、くだ、下るぞ」

キムの歯がかちかちと鳴る。

「はて、何のことですか。神に祈れば罰とやらが下るのならば、私はとくに神に殺されていますぞ。あくまでも人に罰を下すのは神ではない、人なのです。私を滅ぼすとすればそれは人でしよう」

「おのれ……」

「いい夢を見ていたようですね。続きはあちらの世界でご覧ください。アンタの意思を継いで、私が北京民主共和国首席総長となり、世界の覇者となりますから。では、御機嫌よう」

小川は引き金を握る指に力を込める。

一発の銃声が室内に鳴り響いた。そして、その後は高笑いが起こった。

ジョーカーが紫電たちと接触してから数日後、雷電は鳩川を狙うために『クイーン』からの情報に従って、大阪にやってきた。

整った顔は俯いて、空を見上げない。

先のノア計画で壊れた街並みを無視して、ひたすら目的地に向かって歩いた。

時間は昼だというのに暗く、曇った空は今にも涙をこぼしそうになっている。

雷電はアカヒ新聞本社を見つけると、黒装束を纏ったまま、入っ

て
い
っ
た。
。

第九話：反逆（後書き）

こんばんは、J o k e rです。

これも一部修正してお届けします。

小川の狡猾さが出せていればいいのですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十話：雷電

アカヒ新聞本社全体に警報とアナウンスが鳴り響いた。

『侵入者発見！ 赤山社長が危険だ！ ガードマンは社長室、警備兵は全フロアをくまなく搜索し、見つけ次第射殺せよ！』

雷電は得物の日本刀で行く手を遮る警備兵を切り倒しながら、息ひとつ切らさずに社内を駆け回っていた。

黒い服は既に多くの返り血を浴びている。

表情一つ変えず、ただひたすら相手を斬る。

その光景に警備兵たちは次第に手向かうことをやめた。

雷電は社内を閃光の如く駆け抜けると社長室へと繋がるエレベーターに乗り込む。

五分とたたずに高層ビルの最上階、社長室にたどり着いた。

大阪市内を一望できる部屋で、室内には社長用の机とパソコン、観葉植物が置かれている。簡素なつくりだった。

「赤山社長、覚悟を」

テノールボイスが発せられた。言葉に抑揚がない。

「お前が雷電か」

赤山はぎょろりとした目を泳がせた。

「そうだ。情報をいただきたい。鳩川紀夫は今どこにいるか？」

刀の切っ先を赤山に向ける。

「わ、私は知らない。あのお方はたまたま数日前に日本自治区観察に来られた後は行方知れずになっているのだ」

「しらを切られても困る。偉大なる指導者は全てお見通しだ。お前のような人間の考えることは」

刃が鈍く光る。

赤山は目をせわしなく動かしながらも口は閉ざしたままだった。

「意地でも話さないつもりか。鳩川の犬にしては上出来じゃないか。命と引き換えに主を守るとはな」

刀を振り上げる。

「苦痛の生より、安息の死を」

躊躇なく、刃を赤山の頭に振り下ろした。赤山は目を瞑って震えている。

その瞬間、一つの影がその場に現れた。

「貴様の腕も鈍ったものだ。横槍に気付かないとはな」

紫電は自らの刀で雷電の刀を受け止めた。

雷電は二つの目を見開いて、招かれざる来訪者を見つめる。

「何故、君が？」

「貴様が『クイーン』の鍵を握る人間だと聞いた。貴様を始末し、任務を遂行する」

紫電はいつもの鋭い眼光を敵に向けた。

「そうか。千崎が捕まったと聞いたが、紫電たちにだったんだね」

雷電はもう一人の隻腕の男を見た。千崎を抱えている。

「ああ、テメエには関係ねえ。俺の目的のためにコイツは俺が裁く！
邪魔するってんなら、蜂の巣にするぜ？」

左腕の銃口を雷電に向ける。

「愚かだな。この世界を動かしているのも、僕たちの運命を握るのも、これからの世界を形作っていくのも、全て『クイーン』なんだ。何故、無駄に抗う？」

雷電は紫電と距離をとった。赤山はその隙をついて、その場から逃げ出す。

「ふん、愚問だな。任務だからだ」

「気に入らねえから潰す。何か問題があるか？」

雷電は刀を納めた。

「かつての友とは戦いたくないんだ。ここは引いてくれないか？」

「甘ったれたことを言うな。貴様が『クイーン』に加担するというのなら、俺たちは友ではない。敵だ」

「やはり、君はそう言うんだね」

雷電は一瞬で加速し、ガレスの抱えている千崎を奪い取ると、社

長室から屋上へと繋がる階段を登っていった。

「しまった！」

「放っておけ。どの道、ここでは決着はつけられまい」

紫電はガレスを制止する。

屋上からはプロペラ音がして、すぐにそれは消えていった。

「次の手を考えねばな。雷電が次に向かうとすれば……」

「それに、鳩川や小川の動きも考えねえとな」

小川はキム抹殺の後、北京民主共和国首席総長に就任した。

これは小川が以前から巡らせていた策が成功したためであり、小川の世界統一への一歩だった。小川はまず独裁体制を確立した上で、ノア計画で各国に配置した軍隊の力を誇示し、世界中に連邦大戦の停戦を求めた。各国はノア計画と大戦の傷で疲弊しきっており、この要求を吞まざるを得なかった。

次に小川が進めたのが『クイーン』征伐の軍を編成したことだった。

歴史を人間の手に取り戻す。このために、小川は全世界から兵を強制的に徴収し、イタリアのジェノヴァに向かわせた。

これにより、ジェノヴァは至る所で戦闘が勃発していく。

しかし、完璧なはずの小川の計画は鳩川の行動により徐々に壊れていった。

鳩川が小川に反旗を翻したのだ。

鳩川はかねてより結成していた友愛教団を使い、各地でテロ活動を行い、小川率いる北京民主共和国軍と対立していった。

雷電はこれらの動きを掴み、鳩川を始末すべく、再び日本自治区東京エリアへ向かった。この時から『クイーン』は次なる計画を実行しようとしていた。ノア計画も、鳩川の始末も全てはそのための布石でしかなかった。

第十話：雷電（後書き）

おはようございます、Jokerです。

これもほんのちょっとだけ修正。

あんまり変わってないけど、雷電の描写を一部変えました。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編…ルエビザ教団殲滅戦

『羅生門』司令部に紫電の後輩である飛鳥あすかが任務に失敗し、捕ま
ってしまったとの情報が入った。

「何……？」

紫電はその情報を聞いた時に腰を上げた。青年とはいえ、元々人
相のあまりよくない紫電がしかめっ面をするとまるで頭に「や」の
つく自由業の人のように見える。

「仕方ない。助けてやるか」

司令官からの説得でしぶしぶと紫電が動くことになった。組織に
いる以上は上層部の決定に従わなくてはならない。それがたとえ暗
殺組織であっても。

紫電は得物を装備すると、ダークスーツを着て、九州北西部にあ
る長崎県に乗り込んだ。ビジネスマンになりすまして潜入するので
ある。

情報によると、そこで教祖ルエビザ率いる怪しげな信仰宗教団体が
急速に信者を増やし、戦争を起こそうとしているらしい。これは日
本政府からの暗殺依頼であった。

平和ボケした国にままあることである。

長崎の空は蒼い。都会で見る空とはまた違う。

工場の煙や排気ガス、人間で満たされた雑踏などがないせいか、
純粋な青色をしているのである。

ハウステンボスから少し離れたところに大きな教会があった。外
装は白。屋根は鋭くとがった形になっており、色は黒。どこにでも
ある、質素なつくりをした教会に見える。

「ここか」

紫電は呟くと、夕暮れになるのを待って侵入した。手には得物の
忍者刀。

とりあえず見つからぬよう、ぶら下がり用に使える万能鎌を天井

にかけて、そこから様子を見ることにした。

「OH！ 金づるDEATH！ 金づるが脱走しました！」

下手くそな日本語が響いた。発音が主に変だ。明らかに日本人ではない。

「金づる、ヒットらえて、信者にするのデース！」

坊主頭に黒のローブを着た、信者と思しき連中がどこか教会内を暴れまわっている。その滑稽な光景はどこぞの漫才を髣髴とさせる。

「ルエビザ教教説第一条！ 金が全て！」

先ほどの変な発音の男が怒鳴っている。おそらくはこの声の主が教祖ルエビザだろう。

「ルエビザ教教説第二条！ 愛して愛して愛しまくりMATH！」

この謎の号令がかかると、信者らしき集団は教会の奥に走り去っていった。教祖様の台詞を聞くと、何かの宇宙病原菌に感染しているのかもしれない。

「任務開始」

紫電はスーツを脱ぎ捨て、いつも着ている黒の忍び装束を纏った。首から上と手以外全身を包み込み、暗闇に溶けやすい色合いをして、さらに丈夫な麻で作られている。

紫電は足音を立てぬように歩き、教会の奥へと進む。

教会の道はレンガで造られており、その両脇には色とりどりの花が植えられている。ちよつとしたテーマパークのようである。窓にはステンドグラスがあり、様々な色が西欧風の神秘的な室内風景を作り出している。

レンガの道はまっすぐ奥へと進んでいた。

教会の一番奥に行き着くとそこには祭壇があった。木造りのものである。

その裏には何やらスイッチのようなものがあり、紫電がそれを押すとレンガが崩れる音がして、地下への階段が現れた。

「ここか」

紫電は刀の他に、手榴弾をいつでも使えるようにしながら、薄暗い石造りの階段を下りていった。

階段の両側にはロウソクの火が灯されており、ほんのりと明るい。紫電はそこをゆっくりと歩いた。何があっても対処できるように。数分歩くと地階へ着いた。そこには広場があり、階段とは対照的に眩いくらいに電灯がつけられていた。壁はレンガではなく鉄筋コンクリートで作られている。その上には教祖らしき男の絵が飾られていた。

頭の中央部分が禿頭になっており、青色の目であることから西洋人であることが分かる。さらに、ヒゲ面にうさんくさい顔と明らかにまともな宗教結社ではないと思われる。

「信者のミナサン！ あの小娘をHITらえなサイ！」
先ほど聞いた下手くそな日本語だ。

その号令と同時にどたばたと信者たちが動き回る。それぞれの手には日本刀、金属バット、三味線、ハリセンとどう見ても武器に使うのにはふさわしくないものまで握られている。

紫電は隠れるでもなく、その騒動を起こしている連中に近づいた。気付かれない、というよりも脱走者を捕まえるのに必死で気付かないのである。

「飛鳥か」
紫電は呟いた。

脱走している忍び装束を纏った少女の名前を呼んだ。

若干16歳で『羅生門』入りをした日本人で漆黒のポニーテールが特徴である。何故か紫電と共に任務に当たることが多く、紫電はこの少女にまるで妹のように接している。

「飛鳥、助けに来たぞ」
「あ、先輩」

飛鳥が壁を蹴って、空中を飛び回っている。追跡者を翻弄しながら、にこりとあどけない笑みを紫電に向けた。目鼻立ちがはっきりとしており、好奇心の強そうな大きな瞳が目立つ。美少女といって

も差し支えない。その少女が満面の笑顔を紫電に向けた。

素早く細身の身体をひねって、紫電の前に着地すると

「私のために助けに来てくれたんですね。飛鳥、感激です！」
と紫電にしがみついた。

「……離れてくれ」

紫電がべたべたとくっついてきた飛鳥を振り払う。

「女の子を邪険にするんですかあ？」

「バカ。目の前を見ろ」

二人の目の前にはフライパン、土鍋、海老フライを武器として振り上げている集団が迫っていた。もはや、この集団は何をしたいのか分からない。もちろん、作者の私にも分からない。分かったら、ちよっと人間終わってる感じがする。

「アナタが金ヅルのサポーターデスか？ こいつからも金を絞り上げて、教団の資金にするのDEATH！」

教祖らしき男が現れた。信者と同じく黒のローブを纏い、両手には小さなバズーカ。どう見ても、宗教家ではない。テロリストといったほうがいいのかもしれない。

「ルエビザ様、彼らに『愛』をあげましょう！」
信者の一人が叫んだ。

「OH！ 愛が足りないネ！ 愛をあげるヨ！」
ルエビザ教祖はバズーカに弾を込める。ルエビザ教の愛とはバズーカらしい。

「飛鳥、逃げるぞ。こいつらといったら俺の頭はどうにかなりそうだ」
「はい。お姫様を助けに来てくれたんですもの。さっさと悪いハゲ宗教家からは逃げ出さないとね」

「ルエビザへアーをバカにする者には神罰を与えMATH！ バズーカでとつと神の国への引導を渡してAGEるよ！」

愛はどうしたとか突っ込んではいけない。

「司教キタカド、洗脳マシーンを持ってくるのデース！ 洗脳しまくって、ルエビザ潰けにするNE」

次は洗脳する気らしい。

「こんなのに洗脳されるくらいなら、宇宙人に拉致られて脳みそを改造されたほうがいい」

ぼそりと紫電は呟いた。

「先輩、逃げましょうよ！ 私こんなの信者になりたくないです」

「ああ。その前に、教祖。貴様を滅ぼす」

紫電は忍者刀の切っ先をルエビザに向けた。

「面白いDEATH！ やってみなSAY！」

「ふん。貴様と遊んでいる暇はない。十秒だ」

紫電は教祖と五メートルほど距離をとると、飛鳥を下がらせ、手榴弾をばら撒いた。

「神の崇りをご覧にいまSHOW！」

ルエビザは適当にバズーカをぶっ放す。砲弾が地下広場の壁に当たり、部屋が崩れていくのが分かる。

「神とやらに会ったら伝えておけ」

紫電は瞬時に間合いをつめ、刀を横に薙いだ。赤い液体が教祖の体からあふれ出る。

「当分世話になるつもりはない、とな」

ルエビザはどさりと地に伏した。

「目標は沈黙。任務完了」

教祖がやられたことを信者たちが認識するや否や、彼らの大群が紫電のもとに押し寄せ、取り囲んだ。手には棍棒、伊勢海老、マタタビ、エロ本と色とりどりだ。まったくもって、何をしたいのかわからない。あの教祖にして、この信者ありということだろうか。

「あなたの実家に腐ったザリガニを送りますよ！」

「あなたの実家に臭う靴下を送りますよ！」

「あなたの実家に18禁の写真集を送りますよ！」

紫電は苦笑いして

「最後のだけはもらおう」とだけ言い、身軽に跳躍すると、飛鳥を連れて地上へと続く階段へと走り去っていった。

教会から出て街にもぐりこむと、紫電はため息をついた。夜空には星々が無数に輝いている。

「あんな変人をターゲットにしたのは初めてだ」

その声からは若干疲れがにじみ出ている。

「お疲れ様でした。そして、ありがとうございました」

飛鳥は先輩を労うように、優しい声で礼を述べた。特徴のポニーテールが夜風に揺られていた。

「構わん。これが仕事だ」

そっけない返事が返ってきた。

「そういうところ、私は好きですけどね」

小声で呟く。

「さて、帰りましょうか」

その足で夜行列車を使い、紫電と飛鳥は本部への帰途に着いた。

本部へ帰り着いたのは夜明け前だった。

紫電はよろよろと身体を動かし、何とか基地内にある自室までたどり着くと、そこには大きな段ボール箱が一つ置かれていた。

「何だこれは？」

差出人は『教祖R』。日付は昨日の夜となっている。おそらく、あの後信者どもが送りつけたのだろう。しかし、どうやって本部の住所を知ったのかが謎であるが。

まさかと思い開けてみると、腐ったザリガニと18歳未満は見ることの出来ない本、ルエビザ教概説全100巻が詰められていた。

紫電は無言でそれを焼き捨てようと思っていたが

「ちょっと待ってください。そのボタンエビは私が料理します」と飛鳥が制止した。

「これはだな、ボタンエビではなく……」

「ボタンエビです。料理して持って行ってあげますから、休んでいてください」

紫電の悲劇はここから始まった。腐ったザリガニの刺身を食べさせられ、三日三晩腹痛と下痢に悩まされた。

それが回復する頃に、また紫電宛に段ボール箱が一つ届いた。差出人はまた『教祖R』。

「くだらん」

紫電が焼き捨てようとするのを今度は雷電が制止する。

「待ってよ、その中身見てみたいな」

紫電はしぶしぶ段ボール箱を開けると、そこには『ルエビザ愛の写真集』とやらが入っていた。

「俺にこの手の趣味はない。貴様にやる」

紫電はそれを雷電に押し付けると、自室にこもった。久々に任務もない。一日ゆっくり瞑眠を貪ろうとしていた。

紫電の部屋はほとんど何も置かれていないがらんとした部屋である。最低限の食器とベッド、パソコン、キッチンくらいである。キッチンにはフライパンや鍋など一通りの道具は揃っている。そういう意味では持ち主の性格を表現したものなのかもしれない。もつとも、紫電は任務のために自室に戻ってくることが極端に少ないのだが。

昼寝の最中に紫電の部屋のベルがなった。おそらく飛鳥か雷電が来たのだろうか。紫電の部屋を訪れる者は精々、この二人しかない。

「なんだ、俺は今日は……」

ドアを開けた紫電は言いかけて、絶句した。

「愛を届けにきまSHITA!」

先日抹殺したはずの教祖が素っ裸でそこにいた。

紫電は無言でドアを閉めると、司令部に電話した。

「変質者が侵入した。俺の部屋付近にいる。即時、掃討してくれ」

「愛が足りませんNE。紫電SAN、私アナタにAIを教えてAGEるYO」

どこから取り出したバズーカで紫電の部屋のドアが吹き飛んだ。こちらは丸腰である。勝てるはずもない。

「く、来るなあ!」

紫電の叫びが基地内に響き渡った。警報が鳴った。

「紫電の部屋付近を搜索。不審者はすぐに撃破」

司令部から威勢のいい声でアナウンスが基地内に流れる。

暗殺者たちがすぐに出勤し、変態教祖は追い払われた。しかし、

この後も一日に一個のペースで教祖から段ボール箱が届いたため、

紫電は東京都内にマンションを借り、そこで生活するようになった。

この事件の後、紫電は教祖の夢と腐った海老を飛鳥に食わされる

夢に一ヶ月悩まされたという。

番外編：ルエビザ教団殲滅戦（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これも一部修正。

改めて見返してみると色々とまずいところが見つかります。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十一話：場所

「モウ少シデ、完全ナル世界ガ完成スル」

『クイーン』は誰もいない空間で呟いた。それが何を意味するのかは誰にも分からない。何を目指しているのかも分からない。発言者を除いては。

雷電は東京エリアに入った。友愛教団が小川に対して蜂起したとの情報を聞きつけたからである。ぼろぼろの黒い忍び装束を身に纏い、端麗な面は無感情にただ目的地に向かって歩く。

案の定、鳩川はすぐに見つかった。東京タワーを占拠し、友愛タワーと改称して本拠地としている。

「偉大なる指導者よ。鳩川の本拠地を発見しました」

雷電は『クイーン』に携帯電話で通信を入れた。

「ヨクヤリマシタ。鳩川ハ数分後ニたわーカラ出テクルハズデス。ソコヲ急襲シナサイ。ソレカラ、千崎ハコチラニ送ルヨウニ。迎エノろぼつとヲ向カワセマシタ」

「仰せのままに」

雷電は千崎をロボットに預けた。そして、『クイーン』の指示に従い、鳩川を影に隠れて待ち続ける。

『クイーン』の予想通り、鳩川はタワー入り口から現れた。豪華なコートにシルクハットを被っている。

「ボクの友愛王国はまだできないのか」

と側近らしき男に話しかけていた。

「ふん、相変わらず宇宙人だな」

雷電は鼻で笑うと刀を抜き、瞬時に側近らしき男を切り伏せた。

「鳩川紀夫、お前の命頂戴する。全ては偉大なる指導者のために」

まっすぐに獲物を見つめ、雷電は宣言する。

「おお、お前は雷電！ ボクにたてつくのか？ ボクは日本の首相だった男だぞ」

鳩川はあたふたと身体を動かした。目はうつろでどこを見ているのか分らない。

「たてつく？ 違うな。これは命令だ。お前はもうこの世界に必要な人間なのだ。始末する」

「ボクは友愛の伝道師としてこの世界を救うんだ！ 友愛帝国初代皇帝鳩川紀夫として歴史に名を刻むんだあ！」

62歳の男が大人気なく大声で叫ぶのを雷電は無反応で見ている。「大抵愚者は叶わぬ望みを持つ。夢を抱いたまま果てるがいい」

雷電が刀を振り上げると同時に銃声が響いた。銃弾は刃に当たり、的確にそれを破壊した。鳩川は腰を抜かして、その場にへたりこんだ。

「誰だ？」

「調子にのるなよ、ゾンビ野郎」

タワ一の三階からジョーカーが狙いを定めている。

「生きている癖に死んだような目をしやがって」

「お前は何がしたい？」

「とりあえずはこのスポンジ頭の護衛だ。ここで殺されちゃあ、俺の仕事に傷がつくんでね。別にこんな野郎はのたれ死のうが何だっ
ていいんだが」

雷電は濁った瞳を一瞬伏せる。

「とりあえず今日は得物が台無しになってしまった。退かせてもらう」

「もう来んなよ。お前は操られるだけの人形か？」

「何……？」

雷電は表情を変えた。顔がこわばる。

「大方、『クイーン』にまだ犬みたいに従っているんだろ？ もう
悪夢から醒めてもいい頃なんじゃないか？」

答えは沈黙だった。

「ま、お前の生き方だ。俺はこういう言わない。けど、つまらない
生き方だな、と思う」

「僕はもう何を信じたらいいいのか分からないんだよ」

「何信じてもいいんだよ。正解も間違いもない」

端正な顔は俯いた。長い髪は顔を覆って表情は見えない。

「それでも僕はこれにすぎるしかないんだ」

小さな声で呟くと、身を翻し、雷電は逃走した。

紫電とガレスはジェノヴァに戻った。結局手がかりはつかめなかったのである。

「おい、紫電」

「何だ？」

無愛想に顔をガレスに向けずに返事した。

「ここに何がある？」

「『クイーン』に抵抗するレジスタンスのアジトがある。俺は一応ここで仕事を請け負って動いている」

「で、そのアジトに戻るってか」

「ああ」

ジェノヴァの街中を歩いていると、二人はロボットに護衛されて歩いている千崎を偶然発見した。

「おいおい、ビンゴじゃねえか」

「どうかな。おとりかもしれん」

ガレスは片腕に取り付けられた銃をいじる。

「とりあえず、つけてみようぜ」

「任せる。俺は一時レジスタンスのアジトに戻る」

紫電はガレスに任せ、アジトに戻った。

アジトではグレンとマスターが迎えてくれたが、戦況の変化はな
いとのことだった。特にレジスタンスに被害もなければ、『クイ
ーン』の動きに変化が見られたわけでもない。

現在の状況確認だけを終わると、紫電はすぐにアジトから出てガ
レスと合流すべく、歩き出した。

ガレスはただ監視に徹しており、紫電に千崎が『ジェノヴァ教皇
庁』に入っていったことを確認していた。

「十中八九、あそこに『クイーン』がいるとみて間違いないな」

「ああ」

教皇庁はかつてローマ教皇が執務のために使っていた建物である。外敵からの侵入を防ぐために設けられた白い外壁に囲まれた紅いレンガづくりの城で、庭にはバラをはじめとする様々な花が植えられている。また、城の屋上には大きな銀色の十字架が飾られていた。

『クイーン』が置かれることになったのは連邦大戦初期に教皇たちが行方不明になり、この城を使う者がいなくなったからである。それ以来、『クイーン』はここに座り続けていた。

目星をつけると、紫電たちはそのまま監視を続けた。

ある男が来るまで。

第十一話：場所（後書き）

こんばんは、Jokerです。

今日も一日いい日……ではありませんでした。

口蹄疫の感染が八万頭を超え、ウィルスの出所が韓国だとか。盗まれた和牛の精子も行方不明。

推測の域を出ませんが、韓国による牛の盗難ではないかと。

市場価格は既に三割値段を上げており、和牛を食えなくなる日もそう遠くはなさそうです。

というわけで

次回またお会いできることを祈りつつ……

番外編：罪詠む者

「クイーン博士、こちらへ」

白衣を着た壮年の男が同じく白衣を着た老婆を呼ぶ。

老婆は返事せずに壮年の男が指し示すカプセルに入った。

「これでああなたの頭脳を永久に生存させます。頭脳自体は機械化されますが、思考能力には問題ありません。人類最高峰の頭脳が世界発展に寄与することを我々一同強く望みます」

世界的頭脳を持つクイーン博士はこうして、『クイーン』となった。人類の繁栄のために。

そもそもの始まりは世界最高の頭脳を半永久保存、活用する計画が持ち上がったことだった。そこで、すべての科学に長じた天才科学者クイーンⅡウィスタリアが選ばれた。

彼女はその時既に70を超えていたが、知能指数は常人の100倍という驚異的な数値を保っていた。

彼女はプロジェクトチームたちの説得により計画に参加した。

彼女が『クイーン』となってから数十年が過ぎた。

彼女を知る者たちは次々とこの世を去っていく。それを彼女はただ見ているだけしか出来なかった。

「私ハ死ネナイ。世界ヲ救ワナケレバ」

永久の命と共に、世界の指導者として『クイーン』は活動していた。

やがて彼女を知る最後の人間が亡くなった。

「モウ私ヲ知ル者ハイナイ」

誰もいない空間で静かに呟く。これで、『クイーン』をクイーンとしてみってくれる人間は誰一人としていなくなった。

「私ハ涙ヲ流セナイ。死ヌコトモ出来ナイ。神ヨ、何故私ハ存在シテイルノデスカ」

答えは返ってこない。誰にも分からない問いだった。

ある日、『クイーン』は国際連合長官と会談した。
その時だった。

「私ハイツマデ生キルノデスカ？」

「我々人類と共に、いつまでもあなたは生きるのです。人類の平和のために」

「私ノ存在意義ハ？」

「人類の繁栄です」

「私ハ死ヌ権利スラアリマセンカ？」

「あなたが死ぬことは人類の、世界の混乱を意味します。あなたがいて、世界が成り立っている。事実、発展途上国の経済や政治はこの数十年で飛躍的に発展しました。世界的な犯罪発生率も激減しました。あなたがいなくては世界は進歩の道を進めないのです」

その日から『クイーン』はこのことについて誰かに話すことをやめた。

「私ハ天才ナドデハナク、普通ノ人間ニナリタカッタ」

『クイーン』は毎日それを呟いた。誰にも話せない、話したとしても理解してもらえない。それは『クイーン』にしか分からない。

『クイーン』は人々の希望となるために自らの絶望と共に存在してきた。

クリスマスの夜に、ある記者が『クイーン』にインタビューするという企画をくみ上げた。

「今日はクリスマスですが、一番欲しいものはありますか？」

「人々ノ安寧ト繁栄デス」

模範解答を話す。

「デモ、本当ハ……」

弱い電子音が鳴った。

「私ハ安息ガ欲シイ。皆ト一緒ニ老イテ、皆ト一緒ニ死ニタイ。私ヲ私トシテ見テクレル人ガホシイ」

その夜から『クイーン』は考え始めた。

そして、出した答えが連邦大戦の再現だった。

「サア、人々ヨ。私ニ安息ト呪ワレタ永遠ノ生カラ解放ヲ与エテ下
サイ。私ハ神デモ偉大ナル指導者デモナイ。タダ、くいーんトイウ
人間ナノデスカラ」

番外編：罪詠む者（後書き）

こんばんは、二話続けての投稿です。

これは一切修正せず。

『種蒔く者』の番外編では一番気に入っている話です。
モデルは『百万回死んだ猫』。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十二話：暗殺

紫電たちの目論見どおり、雷電はジェノヴァに戻ってきた。

時間は夕刻。時折冷たい風が吹きぬける。太陽はオレンジ色に染まり、地平線のかなたに沈もうとしていた。

所々汚れ、擦り切れた黒装束を纏った雷電は教皇庁に入ろうとしている。

整った顔の頬は痩せて、いつも女性以上に艶やかな髪は荒れていた。

「待っていたぞ、雷電。『鍵』とやらを寄越せ」

紫電は勢い良く自らの得物を抜くと、構えた。ガレスも銃の照準を雷電に合わせている。

「誰かと思えば紫電か」

力なく呟いた。瞳はどんよりと曇っている。

「それとも俺たちと戦^やりあうか？」

生気のない瞳で雷電は紫電を見つめた。

「いいや」

雷電は壊れた刀を見せる。

「僕がこれでは負けてしまうからね。新しい武器を用意しておく。

次こそは……君を、殺す」

雷電は静かに言い放った。

「ふん、決心したというわけか。『鍵』はどこだ？」

「『鍵』は僕自身だ」

「どういうことだ？」

「分からないなら考えるといい」

「そうだな。今日は見逃してやる。次に邪魔するならば貴様を殺す」

紫電は武器をしまうと、雷電に背を向けた。

「ついでに『元』戦友として言っておいてやる。貴様も考えるがいい、貴様自身のことを」

雷電は答えなかった。

「ガレス、今日のところは退くぞ」

「……ああ」

ガレスは唾を吐いた。

「紫電」

立ち去ろうとする紫電に雷電は声をかける。

「何だ？」

「小川は近々『クイーン』を倒しに来る」

「それがどうした？」

「君にも必要な情報だろう？ 小川は今、北京民主共和国首席総長として指揮をとっている。世界をその手におさめるために」

「そうか」

紫電は腕組みし、目を閉じて返事を返す。風が髪を揺らす。

「小川は鳩川と決別したが、君も狙っている。僕は君に死んでほしくないんだ」

「俺を殺すのは貴様だと言いたいのか？」

「ああ。君を殺すのは僕で、僕を殺すのは君であってほしい」

雷電の横顔は夕日を受けて紅く彩られている。

「安心しろ、俺はまだ死ぬわけにはいかない」

「どうして？」

「任務だからだ」

雷電は力無く笑った。

「あはは、君らしいね」

紫電は笑わない。

「それじゃあ、またね」

雷電はゆっくりと歩いて教皇庁に入っていくた。

『クイーン』の前には千崎と雷電が並んで立っている。

「千崎、オ前ハコレカラシバラク北京民主共和国ニ行ッテモライマス。ソコデ私ノ計画ニ反対スルういーげる族ガイマスカラ、彼ラヲ始末シナサイ。ソレカラ、小川モ始末シナサイ。三日後ニ天安門広

場デ演説ヲスルトイウ情報ガアリマス」

千崎は平身低頭して

「はい、仰せのままにいたしますわ」と答えた。

「ソレカラ、雷電」

「はっ」

「新シイ武器ノ開発デスガ、私自身ガ設計シ製造シマショウ。三日ホドカカリマス」

「分かりました。お願いします」

雷電はそれからしばらく『クイーン』のもとから動くことはなくなつた。

紫電とガレスは雷電からの『千崎が小川を追っている』との情報をもとに北京民主共和国へと単身向かつていった。千崎が時を同じくして入国した。

三日後、快晴の首都北京では、天安門広場で小川一郎国家主席総長のパレードが行われている。

「首席総長、キム様の遺志を継ぎ、この国による世界制覇を」

軍人たちが全員で声を張り上げる。

小川は豪華な礼服に身を包み、広場に設けられた壇に上がった。

太陽が小川の広い額を照らす。

「私はキム前首席総長からこの地位と責任を引き継いだ。まずは日本自治区の完全なる統合を行い、そして『クイーン』による世界支配に終止符を打つ！ 我ら北京民族による世界統一実現のために諸君の力を貸してもらいたい」

裏切りの独裁者は吠える。

「北京民主共和国にすべてを！」

「北京民主共和国にすべてを！」

熱気に湧き上がる広場に千崎は数名の刺客を伴って入り込んでいた。全員、小型の拳銃を携帯している。

「いいかい、小川を狙撃するんだよ。失敗したら命はないからね」

千崎は刺客たちに言い放つと彼らをそれぞれ配置し、小川が壇上から降りるのを待つ。

小川はしばらく拍手喝さいを浴びると、壇から降り始めた。その時を狙い、けたたましい銃声が幾重にも響き渡る。

そして、小川は倒れた。どすんと重い音がする。

「おいおい、困るな。俺を差し置いて、随分楽しそうじゃないか。そのケバいオバサンよお！」

ジョーカーが壇の裏から現れた。そして、壇に上ると空に向けて銃弾を一発撃った。

第十二話：暗殺（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これも一部修正。

見直してみると修正するところがあちこちに出ています。

というわけで

また次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：復讐の聖者

「ねえ、お父さん。『種蒔く者』のお話をして？」

5歳ほどの少年が目を輝かせて父親に話しかけた。家の中には煌々と燃える暖炉があり、母親は台所で夕食の準備に取り掛かっていた。窓の外には満点の星空。家の周囲には多くの民家があり、集落を形成していた。

父親は息子の言葉に笑顔で頷くと、リビングにある椅子に座り、ゆっくりと話し始めた。

「むかしむかし、この国では戦争が起こっていました。長い戦乱に国は荒れ果て、誰もが希望を失いかけていた時です。そこに一人の青年が現れました。彼は異国の服を身に纏っていました」

一旦、ここで区切る。父親は穏やかな声で続けた。

「彼は仲間を集めて、戦争をとめるべく、戦いを始めました。戦いをとめるための戦い。矛盾した戦いでした。それでも、人々は心から戦争が終わることを望んでいたので、彼に協力しました」

息子は真剣な眼差しを向けて聞き入っていた。

「彼は長い戦いの末に戦争を終結させることに成功しました。彼は決して名前を明かそうとはしませんでした。そこで人々は聖書から名前をとり、彼を『種蒔く者』と呼ぶようになりました。彼が希望の種を人々に、世界に蒔いてくれたということから名づけられたのです。戦争が終わると、『種蒔く者』はすぐにどこかへと旅立っていきました。まるで、己の役目を終えたと理解したかのように。そして、世界は平和な姿を取り戻したのです」

長い話を終え、息子はまた笑顔になった。

「ねえ、お父さん。『種蒔く者』は現れるかな？」

今は日本が壊滅し、鳩川や千崎、カンガンスらが不穏な動きを見せているとのニュースが流れている。ここアメリカでも長引く連邦大戦の影響によって各地で小規模な戦闘や紛争が起こり始めていた。

まさに『種蒔く者』の話の時と同じだった。

「そうだね。きっと現れるよ」

父親は首にかけている十字架のペンダントを手取る。

「きつと神は我らを見捨てはしない」

そんな話をしているうちに母親から声がかかった。

「ご飯できたわよ！」

「さて、お母さんの美味しいご飯を食べて寝るとしうか」

「うん！」

三人の家族は暖かい食卓に向かい、神に一日の平穏に感謝の意を捧げる。

「神よ、今日も一日無事に過ごせました。明日も良き日となりますよう……」

父親が祈りを終えると、三人は湯気のたったスープや野菜サラダ、鶏肉のフライを口に運び始めた。

美味しそうに食べ物を楽しめる姿に父親は彫りの深い顔をほころばせていた。

深夜、三人が寝静まった頃に静寂を壊す銃声が響く。

「おほほほ、アメリカンどもをとつと片付けるのよ！」

けばけばしい化粧を施した老婆率いる武装集団が教会を取り囲んで、銃弾を容赦なくばら撒いていた。

けたたましい音に父親はがばつと飛び起きる。

「何だ、これは？」

父親の家、教会の外で繰り広げられている殺戮劇に彼は呆然とした。

「神よ、何故我らにこのような惨劇をお与えになったのですか」

短い金髪を揺らしながら、自らの妻と息子を起こすために寝室に入り、この場所から逃れようと言う。

「ええ、何とかしてヨシユアだけでも」

「お父さん、お母さんも無事じゃないと嫌だ」

「大丈夫だよ、母さんもヨシユアもきつと神が守ってください。大

丈夫だ」

集落の周囲は完全に包囲されていた。

絶え間なく、人々を撃ち殺す音と悲鳴がこの世とは思えない地獄絵図を作り出している。

「おほほほ！ 愚民どもや野蛮人どもは北京民主共和国と朝鮮連王国の前に跪くのよ！ 友愛の天下も近いわ、ぐふふ」

三人は結局教会内から出ることが出来ず、政府に連絡の電話をいれ、政府の対応を待つことにした。

数日後、まだ謎の集団は攻撃の手を休めない。そして、教会から三人は出てこない。

「うざったいわねえ。おい、兵士。あそこのボロっちい教会にいるのは誰なの？」

「はっ、名前は分かりませんが、この集落の神父一家かと」

「銃弾で脅してもねえ。爆弾でも持ってくれば良かったかしらおほほほ」

「制圧せずに撤退してもいいのでは？ ここの集落はあの教会以外全て潰しましたし」

「お黙り！ あそこの教会も例外なく友愛の制裁を加えるのよ！
我らは鳩川紀夫率いる『友愛巡礼団』の一員なんですからねえぐふふ」

「はっ」

「そうねえ、毒を井戸と水道に流して殺しましょうか。水は絶対使うでしようし、阿鼻叫喚の図、見物だわあ」

下品に笑うと、老婆は部下に命じて毒を流させ、待つことにした。
「これは……？」

水を飲んで痙攣し、そしてぐったりとする息子と妻を見て、父親は震えている。

「あ、あなた……水に毒が……」

母親は口からだだらだと濁った血を流しながら夫に訴えかけている。

「たす、けて……おとう、さ……ん」

息子は真っ赤な泡を吹いていた。

神父は瞳から大粒の涙を流し、薬を飲ませ介抱したが甲斐はなかった。

「そろそろ死ぬ頃合じゃないかしら」

へらへらと老婆は教会の前に立っていた。

そこに乱暴に教会のドアを開き、父親が現れる。埃だらけの蒼いローブは血で所々汚れていた。

「お前たちが……イリアを、ヨシユアを……！」

神父は怒りに満ちた瞳で襲撃者たちをにらみつける。

「あら、神父さん。穏やかそうな人ね。まあ、野蛮人は死ぬのが定めてヤツよね。おほほ」

「許さん！」

父親は拳を振り上げ、老婆に殴りかかったが、部下に取り押さえられた。

「ふーん、大した威勢ねえ。まあ、気まぐれに殺さずにおくつていうのもいいわねえ」

「千崎様、どういたしますか」

取り押さえた兵士の一人が尋ねる。

「とりあえず、左腕を引きちぎっておこうかしらね。極上の叫びを聞かせて頂戴」

「はっ」

兵士たちは男を押さえつけると、鋭利な大刀を用意した。

「ざくつとやって頂戴。ばっさりとね」

兵士と千崎はにやにやと笑みを浮かべて神父の左腕を切り落とすた。

「ぐああああああ……！！」

おびただしい血が飛び散り、神父は苦悶にのた打ち回る。

「いい叫びだわ！ 聖職者が苦しみもがく様っていうのが見たかったのよねえ」

神父は腕を押さえ込みながらなおも千崎を見た。

「必ず……神の裁き……を……」

「下せるかしらねえ。私は法務大臣様ですからねえ。有罪も無罪も全て決めることが出来る地上の神様なのよ」

「覚えて、おけ……必ず……」

それから神父は気を失った。

千崎たちが引き上げた後に神父は偶然集落を通りかかった医師に発見され、治療を受けた。大量失血をしていたが、奇跡的に一命を取り留めた。

「大丈夫かね。出血は止まったが君の左腕は使い物にならない」
年老いた医師はしゃがれた声で言う。

「構わない。私の左腕を武器に変えることが出来るなら。あの者に復讐することが出来るならば」

神父はぎらぎらと光る目で医師を見ていた。

「……そうかね。君は復讐のために生きるのか」

「そうだ」

「それで妻と子どもは納得すると思うかね？」

一瞬躊躇した。

「分らん。ただ、私を突き動かすものはこれしかないのだ、今は」
数ヵ月後、神父は左腕の手術を受け、新しい左腕を手に入れた。
厳しいリハビリに耐え抜き、神父は聖職者の肩書きを捨て、ひたすら敵を倒すための特訓に励んだ。すべてを捨てても力がほしい、と毎日呟いて。

細かった両腕には逞しい筋肉を運び、言葉遣いも徐々に荒っぽいものへとなっていった。憎悪に取り付かれ、手当たり次第に北京民主共和国兵や関係者たちを抹殺していく人間に成り果てた。

そして、神父は北京民主共和国と朝鮮連王国に指名手配されるまでに至る。『隻腕』のガレスとして。

ガレスはしばらく旅を続け、東京で千崎を発見することに成功した。

「見つけたぜ、ブタ。この街、東京でテメエを殺し、俺の復讐の旅も終わりだ」

その風貌からはかつての僧侶の面影は見えない。ただ、二つの瞳を除いては。

番外編：復讐の聖者（後書き）

こんばんは、J o k e rです。

これも一部修正しました。

ちなみに一番気に入っているストーリーの一つです。

ガレスが紫電よりも好きなものもあるかもしれませんが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十三話…衝動

小川を狙った弾は全て急所を外れていた。

独裁者はSPに守られ、場はジョーカーが取り仕切った。

「千崎、だったっけか。結構な火花だな」

狙撃手は構えると、小川を狙った数名を群集の中からの確に狙い撃った。

「確か、あれはジョーカー。何故、ジョーカーがこんなところに？」
千崎が呟く。

「『クイーン』のシナリオ通りってのは不満だね。さてと、次は千崎。アンタだ。命が惜しけりゃ、出てきな」

大混乱に陥る群集の中から千崎が出てくる。そして、壇から遠ざかる群集とは逆に、壇に向かって歩いてきた。

「よくもまあ、無計画にコトをおこしたもんだな。ま、けど、依頼主からあんたを殺せとは言われてないし、殺すつもりもないんだよな」

がちやりと大きな銃を持ち上げると千崎の右足を撃った。

「でも、動かれても困るんだよな」

千崎の悲鳴を背にジョーカーは小川を警護しながら、姿を消す。

「依頼はこなしただ。俺はこれから故郷に帰るからな」

と言いついてジョーカーは小川の元から去った。

ジェノヴァではレジスタンスが動き出していた。

これまでは紫電に情報を与えるだけであつたが、『クイーン』の動きが鎮静化したことをきっかけに大規模な軍事行動を起こす。

また、日本自治区では日本人による独立運動が活発化していった。
結果、東京都は北京民主共和国から奪還することに成功し、大阪府や京都府で交戦状態に入る。

北京民主共和国は小川一郎首席総長が撃たれるという事件で混乱しつつも、日本人掃討の兵を差し向け、戦乱が再び始まった。

小川暗殺未遂事件から一週間。千崎は足の傷を引きずり、ウィーゲル民族に攻撃をしかけていた。

『クイーン』から預かった兵力に加え、最新のテクノロジーを使った機械兵を投入し、各地の集落を次々と殲滅していった。機械兵とは『クイーン』が開発した人型戦闘用AIロボットである。全体が機械で作られており、思考回路は戦闘に特化している。直接戦闘で人間を圧倒することが出来る。人と変わらぬ肌色の外装を持っているが、頭に巨大なネジが横から刺さっているため、すぐに見分けることが出来る。そして、一体一体は人間が一人一人個性を持つように体型や造りが少しずつ異なっている。

千崎たちはある日、ウィーゲル民族の一軒屋を襲撃していた。高い丘に囲まれた土地に木造りのボロ小屋があり、千崎たちは小屋を取り囲んで銃撃している。そこには四人の家族が住んでいるが、連日続く銃撃により井戸に水を汲めにいけず、誰もが水を求めるようになった。太陽は容赦なく熱気を降り注ぎ、人々の体力を奪って行く。もともとこの土地は砂漠地帯が多く、基本的に一年間を通して乾燥しているのである。

そこで、十歳の息子が銃弾の嵐の中を走りぬけ、何とか井戸にたどり着いた。しかし、水の入った重い桶を持ったままでは銃に撃ちぬかれてしまう。二の足を踏んでいた。

そんな時に紫電たちが千崎を追って、その場所にたどり着いた。

「ガレス、貴様の獲物だぞ」

「ああ。これで、終わりだ。終わりにする！」

紫電は忍者刀を抜き、ガレスは弾を込めなおすと千崎に向かって突撃したが、機械兵の発射する不思議な光線銃の正体が分からず、退避策をとり、小屋まで二人は逃げ込んだ。

「すまない、邪魔する」

紫電は異国の住人に軽く頭を下げる。小屋の中はお世辞にも綺麗とは言えなかった。埃っぽく、あちこちのくもの糸が巣食っている。柱は老朽化しており、いつ崩れてもおかしくなかった。

「いいえ、構いませんが……ここで、あなた方をお助けすることは出来ません。水を汲もうにも、息子があの通り身動きが取れません」
白髪交じりの年老いた女性は窓から水の入ったバケツを持ったまま、銃撃の隙をうかがう息子を指差した。その表情は何日も水を飲んでいないせいか、生気がない。

小屋から息子のいる位置までは二十メートル程度離れている。

「何とか銃撃を押さえ込めばいいんだな」

ガレスが重たい声を出す。

「ええ、出来ればいいのですが。あの機械の兵は太陽光エネルギーをライフルに込めて発射しているのです。人体に当たれば、触れるだけで絶命しかねません」

禿頭の壮年男性がガレスの問いに答える。

「それに、ここには先日引き取った子どもがいるんです」

「引き取った？」

紫電は小さなベッドの上に寝ている影を見た。年齢は三歳で、頬はやせかけている。肌は年齢にそぐわなく、瑞々しさを失っていた。

「はい。隣町はあの侵略者に蹂躪されてしまいました。その際に傷だらけで、ある女性が運び込んだのが、あの子なんです。女性は亡くなりましたが、あの子だけは何があっても……」

「そうか。で、水がいるのか」

紫電は口を閉ざす。

「しかし、相手は機械兵。太陽光は無尽蔵となりゃあ、対策が思いつかねえな。どうだ、紫電？」

「ああ。俺も今のところは、一つしか思い当たらん」

「何だ？」

「特攻」

ガレスは手を額に当てた。

「要するに八方塞、はっぽうふさがりと」

「冗談だ。大体の機械どもの狙撃レベルや銃弾の速度は覚えた。俺がこれから切り込み、奴らの包囲網を崩す。貴様はその隙にあのガ

キを助け出せ」

その時、悲鳴が聞こえた。

機械兵のライフル弾が少年の左足に当たったのだ。即座に足は焼け爛れる。

痛みにもだえる少年の姿を千崎は笑みを浮かべて見ている。

「いいわねえ。昔の神父の時と同じくらい素敵だわ」

「野郎ッ！」

千崎の台詞を聞いたガレスは突如小屋のドアを開け、大声を張り上げた。

「千崎、てめえは俺がここで潰す！ ガキをいたぶって喜ぶテメエに神の引導とやらをくれてやるぜ！」

そして、ガレスは左手をじっと見る。

「頼むぜ、相棒。今まで散々人殺ししといて何だけど、俺に力を与えてくれ！ 俺はもう子どもが死んでいく未来は見たくねえんだよ」

ガレスは銃弾の嵐の中を駆け抜け始めた。

「待て、早まるな！」

紫電の声は既にガレスには届いていない。

第十三話：衝動（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これも一部修正しました。

お楽しみいただければ幸いです。

ではまたお会いできることを祈りつつ……

番外編：レプリカ

「ねえ、紫電」

雷電は透き通った高い声でゆっくりと紫電に話しかけた。雷電は立って、ベッドに座る紫電をじっと見つめている。

場所は『羅生門』本部の特別医療室。最先端の医療器具が並べられており、紫電たちアサシンの治療をする場所でもある。白い壁に白いベッド。室内は白ばかりの物が並べられている。

「僕、『作られた』んだって」

紫電は返事を返さない。

「僕は『クイーン』がこの組織のために作り出した人間なんだって」
紫電は黙り続ける。

「僕は一体誰なんだろう？ どこから来て、どこへ行くのだろう？」
答えは無い。

「僕はどうすればいいんだろう？ 僕は何のために生まれてきたんだろう？」

いくつもの任務を共にし、死線を潜り抜けてきた戦友が語りかける声は震えている。

「僕は何を信じればいい？ 僕は僕を信じることができない。この記憶もこの感情もこの力も全ては『クイーン』が作ったものだとしたら僕は一体何者なんだろう？」

「結局は……」

紫電は初めて口を開いた。

「貴様を救えるのは貴様しかない。答えを出せるのは貴様しかない」

雷電が今度は口を閉ざす。

「俺は俺であって、貴様ではない。貴様が本当に真理を求めるのなら貴様自身することだ。俺に助けを求めるな」

太陽の白い光が窓から差した。紫電は立ち上がって、カーテンを

開ける。

「僕はおかしくなってしまうかもしれない」

「かまわん」

「その時は君が僕を始末してくれ。完全に僕が僕でなくなる前に」

「必要とあらば」

「ありがとう」

雷電は微笑んだ。長い髪がゆっくりと揺れる。

「貴様は貴様であって、貴様以外の何者でもない。現に今こうしているのは『クイーン』とやらの思惑の内か？ そうじゃないだろう。それなら今ここにいるのが『貴様』なんだ。世界にたった一人しかない貴様なんだ」

「うん、そうだね……」

言葉に力が無い。

「それにな、雷電」

紫電は穏やかな瞳で雷電を見た。

「俺も俺が何者かなんて分かっちゃいない。俺はどこで生まれたのかも分からないし、これからどこへ行くのかも分からない。そうやって多分誰もが自分が何者かを完全に理解できずに生きていくんだ」
一息ついた。

「それに……もし、俺が貴様と同じ立場で『作られた』人間なんだとしたら……」

最後は声が小さく、ほとんど聞こえなかった。

「そうか。僕は……人形なのかもしれないな。『クイーン』の手のひらの上で踊るのが僕の定めなのかもしれない」

「そうだな。たとえば、それが運命で定められたことだとしても」

紫電はまっすぐに雷電を見る。

「俺なら、その定めとかいうやつと戦う。俺はそんな決められた人生を生きるのは嫌だから」

「君はそうするんだね」

「雷電、貴様は何がほしい？ 何を求める？」

雷電はしばらく逡巡した後

「僕がこの世界に生きた証がほしい。僕が僕であり、この世界に存在していたという足跡を残したい」

濁った瞳のまま微笑んだ。

「なら、それをすればいい。それは俺には出来ん。『クイーン』にも出来ん。貴様にしか出来ないことだ」

「そうだね」

「さあ行くぞ。次の任務だ。雑念は捨てろ」

「ああ、行こう。紫電」

番外編：レプリカ（後書き）

こんばんは、Jokerです。

読み返してみるとおかしいところがちらほら。

ちょっと修正しました（これもかよ）

タグ？で番外編はコメディとか書いておきながら暗い話ばかりです
すね。

ではまたお会いできることを祈りつつ……

第十四話…英雄

ガレスは奇跡的に無傷で少年のもとへとたどり着いた。

「待ってるよ、今運んで治療してやるからな」

額には脂汗がにじんでいる。

ガレスは上着として着ていた迷彩色の軍用ジャケットを少年の足の傷口に巻きつけた。

「ちっと今は痛えが我慢してくれ」

「うん……」

少年は涙を止めて頷いた。

「紫電！ 援護を頼む！ 俺はこれから戻る」

「ふん、仕方が無い」

紫電はドアを開けるとふわりと跳躍し、上空から機械兵に斬りかかる。

忍者刀は緑色の光を帯びていた。

「あらまあ、アサシンなんかが太陽光エネルギーを使った武器を持っているなんて、おかしいわねえ」

千崎はにやにやしながら呟く。

紫電は一瞥もせず、ただ群がる機械兵を切り倒していった。

「あのガキを狙うのよ！ 子どもの悲鳴もまた最高だからねえ」

「急げ！ 機械兵がそちらに向かうぞ！」

紫電は的確に獲物を切り裂きながら、ガレスに向けて叫ぶ。

「紫電にはこれが必要かしらねえ」

千崎が右手を上げて合図すると、紫電と同じ忍び装束を纏った兵士たちが砂漠の中から百人現れた。

「『羅生門』クローン。使えるかしらねえ、オホホ」

「まずい」

多数の機械兵は紫電を無視して、足に怪我を負った子どもとガレスに銃を向けている。

「逃げる！」

兵士たちの刀を受けつつ、紫電は喉を枯らして声を上げた。機械兵は表情を変えず、銃の引き金を子どもに向けて躊躇無く引いた。

太陽光エネルギーが何十もの銃口から放たれる。

「ちくしょうッ！」

ガレスは避けられない銃撃の雨にその身を晒した。子どもに覆いかぶさり、筋肉で守られた身体に高熱のエネルギーがぶつかる。

「俺が、ちゃんと守ってやる」

皮膚が焼け、真紅の液体がとめどなく流れる身体を動かし、ガレスは子どもを庇いながら走った。

焼け爛れた箇所は刻一刻とガレスの体力と生命力を奪っていく。途中、何度も銃撃を受けたが、全てその身で受け止め、子どもに一つの傷を負わせることなく、小屋に入った。子どもは急いで水を全員に配る。そして、ガレスにも飲ませた。

「ヘッ、とりあえず、これで」

血を吐いた。濁った赤黒い血が小屋の床にこぼれる。

「その傷では動いてはいけません。手当てを」

「いいや」

ガレスは輝きを失いつつある瞳を禿頭の男に向けた。

「もう、俺は助からねえよ」

傷口からは内臓の鼓動が見える。出血は止まらない。皮膚はもう再生しようがないくらい、焼け爛れていた。

「さて、と……最後に、しん、ぷらしいこと……できたかな」

ガレスは瞳を閉じると最後に少し微笑んで、どきりと仰向けに倒れた。ズボンのポケットに入っていた銀色の十字架のペンダントが床に転がる。

「ガレス！」

紫電は兵士たちを全員斬ると小屋に入り込んだ。

「あと、は……頼んだ、ぜ。『種蒔く者』……」

「喋るな。まだ助かる見込みは」

「分かってるさ……もうお、れは……動けない。さい、ご……までお前を……見届ける、ことができない」

紫電は二つの拳に力を入れる。

「なかなか……勇気、あったな。えらかったぞ」

絶え絶えに息をして、ガレスは少年を見た。

少年は涙を流すだけで、何も言えなかった。

「じゃ、あ……な、戦友」

ガレスの二つの瞳が静かに閉じられる。その顔は苦痛にまみれたものではなく、微笑を浮かべているように見えた。

紫電は数秒間目を閉じて、再び開けた。

「貴様の願い、確かに聞き届けた」

静かに眠る戦友に告げると、紫電は刀を抜いて再び、機械兵に斬りかかっていった。

縦横無尽に大地を駆け、一閃一閃で複数の敵を同時に仕留める。太陽光の銃撃は刀身で受け止め、逆にそれを刀のエネルギーにしていた。

すべての機械兵と兵士を斬った後、紫電は千崎に鋭い眼光を向ける。

「た、た、たすけて」

恐れおののき、哀願する老婆に紫電は冷たく言葉を放った。

「貴様だけは……地獄の痛みの中で殺してやる」

紫電は珍しく感情を露わにして、刀を振り上げた。

「わ、私は『クイーン』に騙されただけなのよ！ 本当はこんなことしたく」

紫電は千崎の両腕を切り裂く。

皮膚は変色し、焼け爛れた。

醜く叫ぶ老婆を蹴り倒した後、刀を突きつけて紫電は問いかける。

「『鍵』とは何だ？」

「かかか、『鍵』は雷電のDNAのことよ」

「それで、『クイーン』のいる空間に入るには？」

恐怖に駆られた千崎はぺらぺらと身体を震わせながら喋る。

「あ、あいつのDNAが必要なよ。生体認証プログラムがあって、それで」

紫電の背後から突如一発の銃声が響く。

銃弾は正確に千崎の心臓を貫いた。

「よくも、俺の故郷を襲ってくれたな」

ジョーカーは動かない老婆をにらみつけた。

地面に唾を吐くと、ジョーカーは紫電の元に歩みを進める。

「久しぶり、でもないか」

「ああ、貴様とは奇縁があるようだな」

ジョーカーは野心的な笑みを浮かべている。

「世話になったようだな」

それだけいうと、ジョーカーは背を向けて、砂漠へと消えていった。

紫電は小屋に戻り、住人に頭を下げると

「こいつの墓を作らせてもらいたい」

と告げた。

「はい、我々もお手伝いします」

禿頭の男、その息子とともに簡素な墓を作り、ガレスを埋葬した。埋葬した場所には木で十字架が立てられた。

「じゃあな、英雄^{ビロウ}」

紫電は別れを告げた。

それから後、建てられたガレスの墓にある十字架には文字が彫られている。

『我らを守りし隻腕の英雄ここに眠る』と。

第十四話：英雄（後書き）

こんにちは、Jokerです。

死ぬこと＝名誉ではない、と断っておきます。

ガレスはお気に入りのキャラなので心苦しいのですがここでリタイアすることになりました。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十五話…帰還

「雷電、コレガ新シイ刀『正宗』デス」

『クイーン』は召使のA Iロボットに刀を持たせ、雷電はその刀をロボットから受け取った。

刀は刃渡り一メートル程度と長い。柄はシンプルな造りだが特殊金属を使っており、頑丈で軽い。刀身は白銀に輝いており、切れ味の鋭さを表していた。

「ありがとうございます」

雷電は頭を下げて、それを黒い鞆に収める。

「ソレハ太陽光エネルギーヲ吸収スル機能ガアリマス。紫電の刀『羅刹』ニハえねるぎヲ放出シ、目標物ヲ両断スル機能ガアリマスカラ、ソノ対策デス」

「偉大なる指導者よ、一体あなたは何を目指しているのですか？」

「ソウデスネ。アナタニハ教エテモイイデシヨウ。ゼロニ帰ロウトイウコトデス」

「ゼロに帰る、ですか」

「人ニハイツカ帰ル場所ガアリマス。私ハ、ソコヲ目指シテイルノデス」

『クイーン』はゆっくりと話し終わると、それから言葉を紡ぐのをやめた。

紫電がウィーゲルから去ろうとしているときに、住人たちから武器の設計書が落ちていると知らせを受けた。

千崎たちが落としたものだろう。設計図を懐にしまいこみ、紫電は再度礼を述べてジェノヴァに帰っていった。

小川は撃たれた怪我を回復させつつ、日本へ送る兵を取りまとめ、自ら指揮を取るための準備を行っている。

人民服を着込み、諸刃の剣を太い腰に差した。

鳩川は友愛教団本部を日本に置き、信者と軍備を拡張している。

それぞれがそれぞれの思惑を持って動いていた。

善か悪かは別として、それぞれの願いをかなえるために。

何が出来るか、何をしたいか、何をしようかとそれぞれが考えながら。

程なくして日本で大規模な戦闘が始まった。日本人は日本自治区から義勇軍を結成し、北京民主国軍に戦いを挑む。同時に日本にいた友愛教団も北海道で蜂起し、北から北京民主共和国に攻め入った。ジェノヴァでは『クイーン』の機械兵たちとレジスタンスが全面抗争に入る。機械兵は1万体が動員された。

レジスタンスは機械兵の物量で圧され、徐々に追い詰められていった。

そんな時に紫電はジェノヴァに帰り着いた。

「グレン、帰ったぞ」

紫電はアジトに戻るなり、無愛想にそれだけ告げる。

「いい所に来た。今戦闘が始まっているんだ。手を貸してくれ」

「何だと？」

「機械兵どもが相手だ。紫電なら楽勝だろ」

「問題ない。殲滅する」

言葉通り、一日でいとも簡単に紫電は機械兵を全滅させた。漆黒の忍び装束はかすり傷ひとつついていない。しかし、刀は刃がぼろぼろに欠けていた。

戦いが終わると、既に夜も更けていた。紫電はウィーゲルで手に入れた設計書をアジトの奥でコーヒーを飲んでいるマスターに見せた。

「マスター。この設計書には未知の武器設計図が書かれている。これを製造できないか？」

「やってみよう」

戦いの連続と極度の緊張感のせいか、暖炉の炎に照らし出されたマスターには白髪が増えている。

「小川と鳩川は離別し、戦闘状態に入っている。機械兵さえ潰せば、

『クイーン』も大規模な行動は出来ぬだろう」

「ああ。我々は今世界中に危機を呼びかける計画を進めている。全世界の人々がこの危機を知り、立ち上がれるように」

しゃがれた声で老けたマスターは言った。

「そうか」

「我々に何が欠けていたのか。何が過ちだったのか。それがようやく分かりかけてきたような気がするよ」

瞳は遠くを見ている。

「そうか」

「多分、我々は何かを恐れて『考えて』いなかったんだと思うよ。成功するか、失敗するかは別として考えること自体に意味がある。考えて考えて、失敗したとしても何故失敗したかを理解することが出来る。そして、それを成功へとつなげればいい」

「ところで、世界中に危機を呼びかけるとかいったが」

「ああ、ヴェネツィアにダイナスティというタワーがある。そこは全世界に電波を発信できるところなんだ。そこを占拠、確保して世界に呼びかける。もちろん、日本へも届く」

「タワー制圧の任、俺がやろう」

紫電は静かに少しやつれたマスターに宣言した。

「いいのかね？ あそこはカンガンスが今北京民主共和国軍司令官として占拠しているのだが」

「俺の敵ではない」

いつものように簡単に言っただけのける。

「では、武器開発よろしく頼む」

紫電はふらりとアジトから出て行った。夜の風が空気を切り裂く音が少しだけ漏れてきた。

第十五話：帰還（後書き）

こんばんは、Jokerです。

早く第二部を書きたいので急いで修正して載せます。

といってもあんまりこれは変わっていないのですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十六話…変化

ヴェネツィアはイタリアの中でも最も美しい街のひとつと言われている。港町として栄え、ゴンドラに乗れるということで日本からも多くの観光客が訪れていた。戦争が始まるまでは。

水路に区切られた芸術的な街並みは見るものを唸らせ、訪れる人を魅了する。そんな街が今では北京民主共和国軍により蹂躪されていた。

「我々北京民主共和国軍はこの世の神である」

時刻は、正午。司令官カンガンスはダイナスティの最上階にある展望室で酒を飲んでいる。額の中心にあるほくろが特徴的な老年の男である。緑色の軍服に身を包み、目を細めて街を満足げに見下ろしていた。

展望室は面積100平方メートルほどの空間である。望遠鏡などの設備が置かれているが、兵士たちによってことごとく壊されている。

「カンガンス様、鳩川様が離反したという知らせが」

兵士の一人が口早に告げる。

「よいよい。小川国家主席こそが世界の支配者である。何も心配はいらないのである」

「はあ」

兵士は顔を歪ませて退出した。

その瞬間に兵士は悲鳴を上げて倒れる。

どさりと重い音が響く。

「な、何が起こったのであるか？」

カンガンスは酔った顔でドアを見た。

そこには黒装束を纏った総髪の男が佇んでいる。

「貴様の命、貰い受ける」

紫電は刃の欠けた刀を背中の鞘に収めた。代わりにクナイを取り

出す。

「へへへ、兵士はどこであるか？」

素っ頓狂な声で助けを呼ぶが、誰も来ない。

「兵士などいない。貴様は一人だ」

感情を押し殺した声で紫電は言い放つ。

「おのれ、お前が紫電とかいうやつであるか？ お遍路で悟りを開いた神の声が聞こえぬのであるか？」

「そんなものが聞こえるのは狂っている証拠だ」

「友愛という大義名分が分からないのであるか？ 友愛の名の下に世界を統一する我らが愛を理解しないのであるか？」

「救い様がないな。もういい、死ね」

紫電はクナイを投げた。

「いや、チェックメイトにはまだ早いよ」

クナイは投げ込まれた太刀に叩き落される。そして、見慣れた顔と声が窓ガラスを突き破って現れた。すぐに来訪者は床に刺さった刀を抜き取る。

「雷電か」

「久しぶりだね、紫電」

カンガンスは展望室から逃げようとしていた。

「邪魔だ、まずはこの悟り野郎を殺す」

「いや、偉大なる指導者の命だ。この出来損ないは僕が殺す」

カンガンスは二人の会話を聞き、震え上がる。

「ひ、ひい。何故であるか？ 友愛の名の下に世界を統一する、歴史を変える我々愛の国が何故なのであるか？」

逃げ出そうとするが、しりもちをつく。

「ふん、まあいい。こんな狂ったクズなぞ俺が手を下すまでもない。貴様が殺せ」

「ああ」

雷電は無感情に刀を振り上げると、カンガンスに突きつけた。「偉大なる指導者に牙を剥いた罪は重い。この場で処断する」

雷電は右手でカンガンスを持ち上げると、割れたガラスの隙間に放り投げた。獲物は泣き叫びながら、地上百五十メートルのタワー最上階から落下していった。

「さて、始末は済んだ」

「待て、俺の始末がついてない」

紫電は『羅刹』を雷電に突きつけた。

雷電は長く伸びた艶のある髪を風に吹かれながら

「君の壊れた刀で僕を殺すつもりかい？」

と微笑みながら問うた。

「指一本でも動くなら問題ない」

「どうでもいいけど、僕がいないと君のターゲットは殺せないよ？」

「分かっている。殺さない程度にしてやる」

「手加減できる相手じゃないと思うけどなあ」

雷電はすらりと刀を振り上げ、正眼の構えを取る。白銀の刀身が鏡のように敵を映し出した。

紫電もそれを見て、無言で構える。切っ先を相手に向けた。

雷電は一旦刀を収め、無形の位を取る。二つの瞳はかつての友を見ている。さながら、猛虎が竜に対峙するが如く。

紫電がまず攻撃を仕掛けた。

せまい部屋の壁を蹴り、上下左右あらゆる方向から雷電に斬りかかる。雷電はそれを太刀でさばき、反撃の機会をうかがっている。

「どうした、雷電。貴様はこんなものではないだろう」

「うん」

雷電は無邪気に笑いながら言う。

「じゃあ、本気を出すよ」

大きく息を吸い込む。

「君を、殺すために。我が主のために」

雷電の身体に変化が表れた。

第十六話：変化（後書き）

こんにちは、Jokerです。

そろそろ『種蒔く者』も終盤戦です。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：鳩川インタビュー

「やあ、ボクは鳩川紀夫。はとかわのりお日本の名誉首相だ。ボクは命を大事にしたい。命を守りたい。国民と一緒に愛を広げていきたい」

こんにちは、鳩川君。君の演説を聞いたよ。いやあ、命を大切に
するってのはいいことだね。でも、誰の命を守るのかな？

「ボクはちゅうご……いや、日本人の命と愛を守るのだ。地球の命
を守るのだ」

何か別の単語言いかけなかったっけ？ まあいいや。どうやって
命を守るのかな？

「友愛で守るのさ。日教組や自治労、そして民潭。ボクたちに愛を
くれるみんなにはボクが愛をお返しするよ。そして邪魔者は友愛こうし
ちゃえばいいんだ」

何か冒頭から犯罪臭がするんだけど。日米同盟はどうしたのかな？
「アメリカさんは物騒なんだ。ボクの愛には似合わないからね。そ
の代わりに小川一郎さんが友愛野戦司令官をつとめる北京民主共和
国や朝鮮連王国とは愛の関係を築こうとするよ」

でも日米同盟で守ってもらってたんじゃない？ 都合よすぎない？
「ボクは愛にしたがって生きているんだ。バラク君はちよつと乱暴
すぎるよ。ボク、怖いなあ」

一国の首相の言葉とは思えませんねえ。同盟ではアメリカが日本
を守る。そして、日本も防衛義務を負う。そんな内容じゃなかった
っけ？ 日本はアメリカに協力しないの？

「しないよ。ボクは乱暴な人は嫌いなんだ」

日教組使って各地で暴動と教育崩壊起こしてる人が言うなと突っ
込まれそうだね。

「ボクは愛の伝道師はとかわのりおなんだ。ボクを信じないなら、
友愛し……いやいや、信じてよ」

分かった。じゃあ、もうひとつ鳩川君に聞きたいことがあるんだ

けどいいかな。

鳩川君は脱税したよね？

「ボクは知らなかったんだ。ママが悪いんだよ」

でも10億円以上脱税したんでしょ。気付かなかったの？

「秘書のせいだ。自民党が悪いんだ」

言い訳ばかりだね。それで、追徴課税されたと思うんだけど納税したのかな？

「うん、8億円。小川さんが納税しろっていうから」

どこからそんなお金が？　ちなみに足利義満から献金があったとか記載してあるんだけど、なんで故人から献金が回ってきているのかな？

「ボクは愛なんだ」

日本語で答えろよ。

「愛なんだ愛なんだ愛なんだ！」

駄々こねないでよ。分かった。もういいよ。

そろそろ確定申告の時期だね。国民は納税したくないと言ってるけど、どう言うのかな？　もちろん私も納税したくないよ。

「ボクを信じてよ」

誰が信じるかって答えがコンマ数秒で返ってきそうなんですけど。証拠見せて。

「百年後までに見せるよ」

多分我々死んでますけど。

では次に行きましょう。今、日本で口蹄疫が出てるよね？　あれはどうするのかな？

「愛で乗り越えるんだ。これは愛の試練なんだよ。ボクの思いが強いから、ボクの愛が素晴らしいから愛の神様が試練を与えたんだ」
なんてことほざいたら当事者に殴り殺されてもおかしくないんだよ？　一国の首相なら危機管理も出来ないといけない。

「おそまつ悪阻松大臣には責任は無いよ。彼はメキシコや南米に麻薬入手に行ってたんだ。感染が広がったのは運命でボクたちには何の関係も

ない」

対策本部はどうしたの？

「これから考えるよ。あゝ今晚の夕飯は和牛の炙り寿司にしたいなあ。ボクお寿司大好きなんだもん」

もう一ヶ月以上経つのに？

「うん。これはボクの思いが揺らいでいるからなんだ。揺らぎとは宇宙の真理ッ！ ボクは地球市民として真理を乗り越えるんだ。だからもつとゆっくり考えるんだよ」

日本中の和牛が全滅したら誰が責任取るのかな？

「うゝん……ボクは嫌だなあ。総理大臣の椅子座り心地がいいんだもん。悪阻松さんも責任取らないよ。だって、麻薬の方が大事だったんだもん。悪阻松さんは『日本人などは朝鮮連王国の奴隷がふさわしいふはは』が口癖の人だったら多分放っておくと思うよ♪」

市ねやボケと思うのは私だけではないでしょう。

ところで和牛とブタの値段の高騰が始まっています。対策は？

「愛を信じるんだ。これは国民の皆が受け止める問題だ。だから税金を上げて、子ども手当で在日の方々に愛を配らないといけない。そして外国人参政権もプレゼントして日本を売れば不景気から脱することが出来るよ。これで日本は朝鮮連王国日本支部、『愛の国』に生まれ変わるんだ」

誰だこんな馬鹿当選させたの？

「ボクの思いは口蹄疫を防ぎたいという思いであって必ず防ぐとは言っていない」

詐欺じゃん。

「来月までに対策本部を立てるとは言ったが、今年の6月までとは言っていない。だからボクの愛は偽り無いんだよ」

オレオレ詐欺もびっくりの手口だね。どこから詐欺技術を学んだのかは伏せておくよ。

「ボクは国民の皆様から信託を受けた、日本史上最高の総理だからね。国民の期待にこれまで以上に答えていくよ。さあ次の参院選で

もつと愛をッ！」

その国民って日本人だよな？

「必ずしもボクの思いでは日本人とは限らないよ。日本は日本人のものじゃないんだ。北京民主共和国や朝鮮連王国の皆さんのものなんだから。これは愛のテーマなんだよ」

すまん、俺は何をコメントすればいいのか分からない。

こんなの政権を任せている皆さん、これは皆さんの願いですか？

「そうだよ。国民の願いがボクたちなんだ。口蹄疫だって、広がってほしい。和牛が全滅してもいいって思いがあったからこうなったんだよ。ボクはその代弁者であり執行者なんだ。普天間問題だってどうでもいいって国民の思いが届いたからボクはその思いを大事にして遊んだんだ。ボクってすごいでしょ？」

ええ、すごすぎて涙が出ますよ。

で、畜産農家への補償はどうするの？

「次の選挙でボクたちの応援をしてくれたら補償してあげる。これが愛だね」

応援しなかったら？

「そんな愚民は滅びるべきなんだ。愛を知らない土人は死んでわびるべきなんだッ！これが友愛であり、友愛政治の原点なんだよ」

恐怖政治の間違いだろ？

「ああ、友愛……なんて素晴らしいんだッ！この愛があればボクはどこへでも飛んで行ける。愛に不可能は無いッ！」

その前に目の前の問題片付けようね。

「問題？何かあるの？」

普天間とか口蹄疫とか。

「あんなの知らないよ。ボクの愛にふさわしくないからだ。別に畜産農家が破産しても、和牛が消えてもボク困らないもんね。朝鮮連王国や北京民主共和国に保護してもらえばいいんだもん」

アンタ最低だな。

「ボクの思いがあれば全て解決する。国民の皆さんに政府は万全の

対策を講じているという思いを受け取ってほしいんだ」

どう見ても駄目駄目ですが。

「そんなことないよ。友愛精神が足りないからだ。今の批判だって『鳩川くん、もっと頑張って』っていう思いなんだと思うよ。愛って素晴らしいよね」

もういいッス。帰ります。

「ボクの愛は時代を超えるんだ。こんな思いがあるから、国民の皆さん。これからはとかわのりおをよろしくね。愛でこの国を破滅に導いていくよ。ボクの利権が第一、はとかわのりおでした」

割と最低な締めをありがとう。

これで鳩川インタビューを終わります。

番外編：鳩川インタビュー（後書き）

こんにちは、Jokerです。
これもアレンジしました。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十七話：戒正

雷電の背中から二つの黒い羽が生え、異形の形を成していった。

「これが、僕が手に入れた新しい力だ。この刀と一緒に」

漆黒の瞳で雷電は紫電を見つめる。波紋のない水面のように穏やかな視線を送った。

「『クイーン』の技術で肉体改造をしたか。そこまでして勝たいたいかな？」

「勝ちたいね。我が主のために」

紫電は言葉を交わしながら刀を打ち込んだ。乾いた金属音が響く。「そのためなら、僕は化け物にも悪魔にでもなる」

雷電は床を蹴ると、その部分が碎ける。高速で紫電に近づき、重い一撃を叩きおろした。『羅刹』が粉々に碎け散る。

「僕の存在意義はもう、ここにしか見出せないんだよ」
消え入るような声で呟いた。

紫電は雷電の前から飛びのく。

「貴様の太刀筋、似ているな」

「そうかな」

雷電は漆黒の翼をはためかせる。

「もう帰るよ。今の君にこれ以上、戦いをしかけてもつまらないからね」

「殺すんじゃないかったのか？」

「新しい武器を用意して、もう一度戦ってほしい」

「相変わらず勝手なヤツだ」

雷電は微笑む。そして割れたガラスの隙間から飛び去っていった。「落ち着いてもいられないな」

紫電は雷電の一撃を受けた右腕をだらんと垂らしながら、左手で携帯を取り出す。

「こちら紫電だ。タワー制圧完了」

『ご苦勞。すぐにグレンと私が行く』

マスターとの短い通信の後、紫電は携帯を懷にしまい込んだ。
その場に座り込む。

「今度、日本に戻ったら確かめねばな」

小川は日本海で鳩川との戦争に入った。日本への派兵は自らの懷
刀である悪阻松^{おそまつ}に任せ、船上で友愛教団軍とにらみ合う。小川率い
る北京民主共和国軍は百隻。対する友愛教団軍は五隻。戦力差は歴
然だった。

「鳩川、貴様はワシがかけてやった恩義を忘れたのか」

曇天の空の下、人民服を着込んだ小川が野太い声を出す。

「うるさいうるさい！　ボクちんの愛が受けられないのなら友愛^{こう}す
のだあ！」

幼稚園児のように鳩川はわめく。

「ふん、哀れだな。精神崩壊をすでに起こしていたか」

「ボクちんは宇宙皇帝はとかわのりお六十三歳。お前如き、独裁者
には負けないのだ。愛は無敵なのだ。思いは世界を超えるのだ」

「日本を売った仲間として楽にしてやる。第一艦隊、前へ」

小川が指示を出すと、十隻の軍艦が前進する。そして砲撃を加え
た。

「ぐはははは！　北京民主共和国の前にひれ伏すがいい」

戦況は北京民主共和国軍が圧倒的に有利になって進んだ。
数時間すると鳩川の乗った戦艦以外は海の藻屑となっていた。

「ぼ、ボクの友愛ボートが……」

わたわたと慌てふためく。

「鳩川を捕縛せよ。まだ殺すな」

静かに小川が命令を下すと、一隻の軍艦が鳩川の乗っている船に
近づいた。

それを確認すると、鳩川はほくそえんだ。

「ボクの愛は無限なのだ。同志たちよ、決起して友愛革命を起こす
のだー！」

鳩川が大声を張り上げると、北京民主共和国軍の半数が砲台を小川の船に向けた。

「鳩川、貴様何を仕組んだ？」

「これが愛ですよ、小川さん。金で愛を買う。金で買えないものはありませんからねぐふふ」

「ま、待て鳩川」

「友愛^{しゅうあい}せ！ ボクちんの前に沈むのだあ！」

重い音が響いて、北京民主共和国軍内部で戦いが始まる。鳩川はただいつものように、船の上で銃に『友愛』と書いて笑っていた。

マスターとグレンはすぐにダイナスティに到着した。

額には汗が残っている。

「紫電、これが頼まれていた『戒正』の完成品だ」

マスターは漆黒の刀身を持つ忍者刀を紫電に差し出した。柄の部分にはトリガーがつけられている。

「ありがたく頂戴する」

静かに札を述べると、紫電はそれを受け取った。

『この力は己を戒め、正しきに使うべし』

柄に日本語で書かれている。

「師匠、確かに俺はこれを正しきに用いると誓います」

小さな声で言うと、紫電はそれを背中におさめた。

「さて、紫電。これからが見せ場だぜ」

グレンがにやりと笑って持ってきた機材を組み立て始めた。

第十七話：戒正（後書き）

こんにちは、Jokerです。

これは第二部に少し繋がる部分です。
さらにちよいと修正しました。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：幼き瞳は何を見る？

俺は日本で生まれたごく普通の子どもだった。普通に笑い、普通に暮らし、普通に学校に通い、普通に友達を作った。あの時までは日本は、というより俺の家族は『クイーン』の使いとかいう連中に殺された。あれは俺がまだ十歳の頃だったと思う。それから、俺は暗殺組織に入った。力が欲しかった。すべてを圧倒する力、すべてを守る力、誰にも屈さない力。その頃の俺は多分力に取り付かれていたんだろう。力さえあれば、といつもいつも思っていた。

その日はいつもと変わらぬ蒼い空だった。いつものように人を狩り、血を浴びて、組織に戻る。そんな日の夕方だった。

「紫電、君は今日から『羅生門』特務部隊の剣部隊こるぎへの入隊が決まった」

俺に忍者刀『羅刹』の使い方を教えてくれえた零ゼロ師匠が俺に告げた。師匠も俺と同じ日本人で甲賀甲谷衆忍者の末裔なのだそうだ。漆黒の肩までかかる長髪、漆黒の瞳、そして黒装束。全身を黒一色で固めた服装は師匠のトレードマークだ。年齢は三十四で既婚だと言っていた。はじめは俺も変なオヤジだと思ったもんだ。

「はい」

「どうした？　あまり嬉しそうじゃないな」

優しい瞳を俺に向けて微笑む。

「いえ、あまり実感が湧きません。まだ俺は十代半ばのガキに過ぎませんから」

「しかし、そのガキが全科目トップなのだ。技術も精神力も、申し分ない」

「ありがとうございます」

「しかも、剣部隊の隊長は俺だったりするんだなこれが」

「はあ？」

俺は訝った。

「師匠は特務部隊なんて柄じゃないと思いますが」

「何を言う？ 俺こそが隠密中の隠密ではないか？」

からからと笑う、その姿からは組織一の暗殺者の面影はない。まるでどこにでもいる父親のような感じた。

「でも、今度の任務はかなり厄介なんですね」

「分かるか」

一瞬だけ師匠の瞳が獰猛なものへと変わった。あれが俺たち『人を狩る者』の目。

「今度ウィーゲル地方への仕事が入ってな。要人暗殺なんだが、国家レベルで影響力をもつ政治家らしいのだ」

「それで師匠が抜擢された、と」

俺は一抹の不安を感じていた。それは虫の知らせというやつかもしれない。

「ああ。それで、今『戒正』^{かいせい}という新しい武器を開発しているのだが、その武器をお前に譲ろうと思ってな」

「組織が開発したものを俺みたいな新米に与えていいんですか？」

「もちろんだ。お前は俺の跡を継いで世界一の暗殺者になる男だからな」

師匠の言葉は信頼できる。本当に思ったことしか口に出さないからだ。そう考えると、ちょっとは自分に自信を持ってもいいような気がしてきた。

「ありがとうございます。で、そのウィーゲル遠征は俺も行くんですか？」

「いや、お前は留守番。大事な後継者を危ないところへは行かせられんよ」

「はあ」

「不満か？」

「いえ、任務とあらば」

「不満というわけだな」

「正直に言えば、そうなります」

師匠は少し考えている様子だった。言葉を選んでいるのかもしれない。

「紫電、お前にはただの暗殺者にはなってほしくないのだ」

「というത്？」

「己の目で物を見、己の頭で考え、行動する人間になってほしい」

「何故ですか？ 俺の思考力に問題があるとでも？」

「いや、そうじゃないんだ。俺たちは特に依頼者の意向に従う。だから、つい何も考えずに依頼をこなすことだけを考えるきらいがある。お前にはそんな人間になってほしくないんだよ」

整った顔で師匠は俺に向かって、はっきりと言った。

「俺は、いや俺たち日本人は『考えなかった』が故に、独立国としての主権を失い、北京民主共和国の属国に成り下がっている。それはもちろん、鳩川や小川、カンガンスなどのせいでもあるだろうが、何よりの原因は国民一人一人が自分の頭で物を見て、考えなかったところが大きいと思うんだ」

「確かに、アカヒ新聞や毎朝新聞、各種テレビ局に誘導されていたこともありましたから」

「だから、これから先に生きていく上で俺たちに最も欠如しており、必要なものがこれかだから俺はここでお前に伝えておく」

「今生の別れみたいなこと言わないでください」

師匠は夕焼け空を仰いだ。

「いや、こんな仕事だからいつ死ぬか分からない。死んでからではお前とは言葉を交わすこともできない。だから、言える時に言っておく」

そしてまたにこりと顔をほころばせた。優しい父親が子どもを見守るように。

突如、師匠の携帯が鳴る。

「はい、こちら零です。はい、これよりウィーゲルに移動します」
作戦開始らしい。師匠の顔つきが変わる。いつもの優しい目つき

から獲物を狩る猛獣の瞳へ。

「紫電、後を頼む」

「お引き受けできません」

俺は子どもだったんだろう。何故か行かせたくなかった。

「お前は俺が認めた男だ。大丈夫、お前は充分強い」

師匠は駆け出すと飛行場に停めてある飛行機に乗り込んだ。

それから二週間後、師匠がウィーゲルで戦死したとの知らせが届いた。特務部隊はこれを機に解体、俺は一般暗殺部隊へ異動になった。

『戒正』の設計図も同時になくなっており、組織では『戒正』の開発と量産を無期限停止とする措置を取ることになった。俺としては残念だが、仕方がない。何よりも、師匠がいない日々が俺に虚無感を与える。

もう誰も俺と口を利かない。もともと無愛想なのは承知しているが。

そんな時だった。

「やあ、君が紫電？」

テノールボイスが休憩所の椅子に座って俯く俺にかけられた。

「貴様は誰だ」

目の前には女性と見紛うくらいに整った顔の青年がいた。蒼い忍装束、首に白い防護用マフラーを巻いている。俺よりも年上か？

「はじめまして、僕は雷電。次の任務から君のパートナーをつとめることになったんだ」

笑顔で自己紹介して、雷電は細長い太刀を見せる。

「それが貴様の得物か」

「うん」

なんだか調子が狂うな。こいつは暗殺者に向いていなさそうだ。

「さ、行こうよ。今回の任務はアメリカ高官の抹殺とアメリカ特殊部隊の壊滅。楽しめそうだよ」

俺はその時、ヤツの表情を見てぞくりとした。

まるで人殺しを楽しむように、言つてのける。

同時に整った顔は冷徹な殺人人人形の顔になる。一切の感情が読み取れない。

「貴様、もしや……」

「そう、君の思つた通りだよ」

雷電はくすくすと子どものように笑う。

「さ、行こう？　僕たちがこれから戦うわけじゃないんだからさ」

「ああ」

「でも、僕たちが戦ったら、どっちが強いかな」

「さあな。興味がない」

「ま、楽しくやろうよ。ほら、スマイルスマイル」

「任務で笑えるか。行くぞ」

「ま、待ってよお」

「知らん」

俺の師匠がいない日々はこうして始まった。

いつか、こんな日々が壊れることをどこかで危惧しながら。

いつか『クイーン』を倒すと心に秘めながら。

番外編：幼き瞳は何を見る？（後書き）

こんばんは、Jokerです。

今回は番外編をお送りしました。
少年時代の紫電のお話です。

これもまた第二部への伏線張つてあります。
どこか見抜けましたか？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：紫電のアルバイト

「紫電、緊急の任務だ」

冬期休暇に入っていた紫電に司令官から連絡が入った。

「何ですか」

けたたましいコールで起こされた俺はぶっきらぼうに答える。ぼさぼさにとんがった髪を整えながら。

「民間からの依頼なんだが、ある店で店主の代わりをしてほしい」

「はあ……？」

わけがわからず電話を切った。

いつもの黒い忍び装束で司令官室へ赴くとそこには雷電と飛鳥がいる。

雷電は紫電と大抵の任務を共にしている戦友で女性の憧れの的となる美貌を持った青年である。一方で、飛鳥は若干16歳の少女でありながら組織に暗殺者として配属されている。腰まで届く漆黒のポニーテールが特徴の美少女だった。

「それで、どういう内容ですか？」

二人を押しかけて司令官に聞く。

「うむ。都内の寿司屋で働いてほしいのだ。応援はこの二名をつける」

俺はまじまじと二人を見た。

「紫電、大丈夫だよ。僕は料理も出来るし、接客も任せて」

「先輩、私も料理頑張ります！」

俺はコメントできなかった。飛鳥の料理は殺人級だということを知っているのだから。雷電は何かやらかしそうで怖い。女性客をナンパとか。

「数少ない民間への貢献なのだ。しっかりやってほしい」

司令官から直々の依頼となれば絶対に成功させなければいけない。俺は早速現場に行き、準備を整えはじめることにした。

司令官のいう寿司屋は都内築地にある。

築地はいわば貿易港の役割を果たしており、全国各地から物品が集積する市場である。そのため、意外な掘り出し物が見つかったり、格安でほしいものが手に入ったりするのだ。

一方で治安はあまりよくない。外国人が多いことに加えて、スリなどの犯罪が多発する地域でもある。

俺たちは翌日朝五時に店に入り、仕入れに出かける。

そして、鮮魚を仕入れると仕込みに入る。すぐに握れるように、魚をさばいて骨などをとる。

開店の十一時には品物を提供できる状態に三人で仕上げた。

「いらっしやいませえ！」

飛鳥はメイド服で開店直後に来たお客に笑顔を振りまく。前頭部が薄くなった小太りの中年男性だ。

「いらっしやいませ！」

雷電も服を着替え、お客を迎える。ワイシャツに赤の蝶ネクタイ、黒のスラックスだ。何か間違っていないか？ 無意味に鼻の下に付け髭しているあたりが。

「いらっしやいませ」

俺はというと割烹着を着て寿司を握る準備をしていた。

お客がカウンターに座るのを確認すると、飛鳥は熱いお茶とお手拭を運ぶ。そして、注文をとった。

「ボタンエビ」

とお客から声が上がる。

「海の中にいる」

俺の答えに男性はぎょつとした。何だ？ 至極真っ当な答えではないか？

「せせせ、先輩。ちよつとその答えはまずいんじゃないか？」

「ないものはない」

「別の言い方したほうがいいですって」

「そうだな」

「お客様、申し訳ありませんが仕入れがありません。甘エビでしたら、あります」

飛鳥がフォローしてくれた。

「じゃあ、甘エビで」

というわけで俺は手際よく甘エビの軍艦握りを作る。

作った握りを飛鳥が予め容易していた皿に盛り付けて、出した。

その間にまた一人お客が入ってくる。今度はガタイのいい角刈りの青年が入ってきた。

「いらっしやいませえ」

飛鳥が猫撫で声で愛想を振りまく。

お客は一瞬見とれてから、飛鳥が持ってきたお茶を受け取った。

よくぞここまで猫かぶりが出来るものだ。

「先輩、うなぎセットです」

「了解した」

俺は予め仕込んでいたうなぎで握りをつくり、雷電は赤だしを入れる。数分と経たずに品を出した。

正午ごろになると、また一人お客が入ってきた。案外少ないものだ。しかし、来た客が衝撃的であった。

「Yahoo! ここは私ノ聖地ニシマス。大将、食べ放題コースヲよろseek」

どこかで見たエセ宗教家が来やがった。両手にはバズーカを持っている。日本警察は一体何をしているんだ。とっとと逮捕して国外退去処分にもすればいいものを。

「OH! アナタは紫電San。ここで会えるなんて神の思し召しNE。愛の抱擁をAgerよ!」

「俺に触れたら斬り殺す」

ありったけの殺気を放ったが、暖簾のれんに梅干だった。ちなみに、暖簾に梅干とは『暖簾に梅干を投げて落ちるだけ』。つまり、まったく無駄なことのたとえだ。広辞苑あたりで調べてみるといい。多分載ってないから。

「飛鳥、雷電。この危険人物を排除しろ」

「でも、お客なんですよねえ。お金落としていってもらえるならいいんじゃないですか」

「うん、我慢しなよ。お客さんをもてなすことも仕事のうちなんだからさ」

この薄情者！！ 俺の命はどうでもいいというのか？

「では、宣教師さん。ご注文は？」

飛鳥はにっこりと極上の笑みを浮かべて注文をとる。

「紫電サンの活け造りを一発くだSay」

俺は無意識に懷にあつた刀を取り出そうとしたが、雷電に取り押さえられた。

「抑えて抑えて。今日一日の辛抱だから」

俺は仕方なく鰯の握りと鯛の味噌汁を出す。エセ宗教家はしゃくしゃくと平らげた。おのれ、鬼退治のお爺さん秘伝の『最悪液体X』でも仕込んでやろうか？

ルエビザはものすごいペースで寿司を平らげた。優に100巻は食っている。いくら食べ放題といっても、こちらの懷が厳しい。というか、もうネタがない。特に高級食材の。

「紫電サン、うにといくらとトロくだSay」

「帰れ」

素で言ってしまった。

「せ、先輩。それはまずいんじゃないあ……」

「飛鳥ちゃん、ちよつと……」

雷電が飛鳥と何やらひそひそと会話を交わしている。

「DoしたんDeathか？ まさか、Neta切れ？」

「貴様を斬りたいところだが、その通りだ」

我ながらものすごい会話をしていると思う。

俺一人で宣教師を相手にしていると雷電と飛鳥が戻ってきた。二人は笑顔で

「紫電（先輩）をあげますから、今日はお引取りください」

と声を揃えてのたまいやがった。

「Oh! これぞA I。神の思しM e s iね」

「貴様ら、俺を生贄にでもしようというか？」

雷電と飛鳥は笑顔で答える。

「いやいや、お客さんのニーズにこたえるのも立派な客商売だよ。
ルエビザさんと一緒に宣教師の館に行つて来なつて」

「でも、先輩に手を出さないでくださいね？」

「そういうわけD e a t h。一緒に我がルエビザ大聖堂にはいりま
S h o w」

俺は仕事着のまま、ルエビザに連れ出された。逆らえばバズーカ
を街中でぶつ放すと脅しをかけられ、仕方なく『ルエビザ聖教団撃
滅鉄鋼銃撃本部』に入る。名前からしてまともではない。

「さあ、我らが神『ルエビザ』に祈りを捧げまS H O W。経典は『
偽の教典』D e a t h」

「思いつきり邪教丸出したな」

「いえいえ、聖なる宗教団体D e a t hよ。これで世界征服を夢見
ています」

俺とエセ宗教家は白を基調とした豪華なつくりの神殿に入った。

古代ポリスにある建築構造を彷彿させる。

そして、そこで俺は延々丸二日説教を受けた。

『偽の教典』全128章を丸暗記した。これで俺もルエビザの信
徒に……いかん、本来の任務を忘れていた。

仕事を思い出して本部に帰還すると、司令官から『一体この二日
間で何があったのだ』と本気で心配された。俺がルエビザ教に帰依
したのがそんなにかしいのだろうか？ 俺は身も心もルエビザの
教えに捧げたのだ。洗礼名ももらったぞ。『ダニエル紫電』という。
雷電は俺が宣教師服を着て『偽の教典』を読み上げる姿を見て大笑
いし、飛鳥は涙を流していた。

俺は『偽の教典』の台詞がそれから丸一週間抜けなかった。やつ
とまともになりかけてきたところにまたルエビザが本部に襲撃をか

けたというニュースが飛び込んできた。

俺はもうヤツに関わりたくはない。洗脳だけは勘弁だ。
こうして、俺の緊急指令は終わりを告げた。

番外編：紫電のアルバイト（後書き）

こんばんは、J o k e rです。

今回も番外編をお送りします。

しかしルエビザ、使えます。このキャラは高校生時代に作ったキャラなのですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十八話…伏線

グレンは組み立てた機械を展望室にある大型マイクに繋いだ。

「これで全世界に電波を飛ばして呼びかける。マスター、よろしくお願いしますよ」

マスターはマイクを両手で押さえ、力強く言葉を紡ぎ出した。

「全世界の皆さん。我々はジェノヴァの対『クイーン』レジスタンスです。長きに渡る戦いの毎日、我々は終止符を打つべく動いています。『クイーン』を倒すべく動いています」

ひとつひとつ、丁寧に話していく。

「我々レジスタンスに力を貸していただきたい。日本、アメリカ、イギリス……すべての国で混乱が起こっているでしょう。すべての力をあわせて、歴史を人の手に！ 人類が作り、人類が動かす世界へ再び！」

額には脂汗が吹き出ている。

「マスター、お疲れ様でした」

グレンはマイクのスイッチを落とした。

「うむ、これで世界が呼応してくればいいのだが」

「ふん、そんなに簡単にいくとは思えんがな」

「ならば、君が動けばよい。日本に行つて、日本軍を助けてきてくれ。確か今、小川一郎率いる北京民主共和国軍と対決しているはずだ。彼らにも『クイーン』討伐に協力するように要請してほしい」

その言葉にすぐ紫電は返事をする。

「いいだろう。俺が行つて始末をつけてやる」

「こっちは我々に任せておいてくれ。グレンもいる」

「ああ」

紫電は日本へ飛ぶことになった。

かつての師が譲ろうとしていた刀を背負つて。

日本海の戦いでは鳩川率いる友愛教団軍が勝利を収めた。総司令

官である小川一郎が戦闘の混乱によって行方不明になったからである。そのため、北京民主共和国軍は混乱していた。

鳩川はすぐに搜索の兵を出し、小川を大阪で発見した。

数百の兵を動員し、小川を廃ビルに追い詰める。

小川はビルの地下室に逃げ込んだ。

「く、くそう。まさか、この私が鳩川ごときに……」

小川が自決を図ろうとしていたときに、地下室のドアが乱暴に開けられた。暗がりにはうっすらと日の光が差し込む。

「おやおや、小川さん。こんなところにいたんですか」

鳩川が笑顔で近づく。

「貴様、裏切り者めが！」

小川は額から血管を浮き上がらせた。顔は引きつっている。

「おやおや、何を仰いますか。ボクちんたちは日本を潰し、天皇を殺した仲間ではありませんか。いわば、同志ではないですか」

「貴様のような精神障害者など同志ではないわ」

「ボクちんが狂っているとしても？　ボクは愛の伝道師鳩川紀夫ですよ。ゆくゆくは愛の帝国を築いて、帝王となる人間なんですよ。狂っているわけではないじゃないですか」

「ふん、その思考回路が狂っているといっておるのだ」

「日本自治王の夢は叶いませんでしたね、小川さん」

鳩川は拳銃を上等なブラックスーツのポケットから取り出した。

「愛の前には全てがチリにも等しいんですよ。友愛、これがボクの正義です」

「私をどうしようというのだ？」

「何、ちよっと眠ってもらいます。殺しませんから」

「貴様、また何か企んでいるな？」

「ええ。まあ、冥土の土産じゃありませんけど聞かせてあげましょう。ボクの世界掌握計画を」

へらへらと笑いながら鳩川は話し出した。

「ボクちんの愛の国を作るには兵士がいるんです。それも屈強な。」

紫電に負けないくらいのね」

「人造人間でも作るつもりか？ 貴様のような狂った脳みそでは作れんぞ」

鳩川は顔をしかめて小川の右手を撃ちぬく。

「うるさいうるさいうるさい！ ボクちんの演説だぞ。大人しく聞くんだ」

鳩川は幼稚園児のようにわめく。

「まあいい。ボクの愛に感謝するんだ。ボクは友愛の力で人間の筋力、思考力などを極限まで高める物質を発見したのですよ。人間の体内に埋め込んで使えます。でも、これを使うとその人間は廃人になっちゃいます。身体がぼろぼろになって最後には喀血して死んじゃうんですよ」

小川は右手を抑えながら、目を見開いた。

「まさか」

「そうです。人間爆弾を作ればいいんです。使い捨てにすればいいのだ。ボクの愛のために散る兵士たちを」

「外道めが」

「外道ですか。小川さんこそ、朝鮮連王国や北京民主共和国の方々と一緒に日本人を殺したり、レイプしたりしたでしょう。あなたには負けますよ」

鳩川は依然としてへらへらと笑っている。その瞳はどこを見ているのか分らない。

「今度はあなたが愛の殉教者になる番です。ボクの帝国のためにボクの忠実なる兵士に」

鳩川は小川の四肢を撃ちぬき、兵士に運ぶように命じた。そして、『クイーン』を倒すためにジェノヴァへと飛んだ。

第十八話：伏線（後書き）

こんばんは、Jokerです。

タイトルどおり伏線が仕込まれています。
回収が大変そうですが（笑）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十九話…決戦

紫電が日本に到着して数日。

小川の行方不明が北京民主共和国軍の動揺を誘い、日本軍は勝利を収めた。

そして、独立宣言を行った。ここに新しく日本は独立国として再び世界の表舞台に現れる。

日本軍はそのまま『クイーン』討伐へと矛先を変えた。

紫電は終戦を確認すると、日本軍が移動するより先にジェノヴァに戻る。鳩川たち友愛教団がジェノヴァで『クイーン』相手に戦争を仕掛けているというのである。

「マスター、グレン。緊急で俺は今から『クイーン』を直接倒しに行く。機械兵どもに押し切られぬよう防衛に努めてくれ」

紫電は携帯で連絡を取ると、すぐに教皇庁に入り込んだ。

「頼むぞ、『戒正』。倒れるときは一緒だ」
相棒に一声かける。

教皇庁の外庭では既に戦闘が始まっており、機械兵と鳩川軍の兵士たちが銃撃戦を繰り広げている。市民の憩いの場は踏み荒らされ、綺麗に植えられた花はぐしゃぐしゃに散らされている。

紫電はそれらを一切無視して、庁の内部に駆け込んだ。

行く手を遮る機械兵を一閃し、疾風のように走り抜ける。

数分走ると大きな扉にぶち当たった。扉は開いている。

「やあ、紫電。待っていたよ」

そこに雷電が立ちふさがる。

「貴様か。どけ」

「ああ。どくよ。ただ」

雷電は一呼吸置いた。

「これは偉大なる指導者の命だ。教皇庁最深部に来い」

「いいだろう。鳩川もそこにいるんだろう？」

「ああ、鳩川紀夫も通せとの命令だからな」

雷電は開け放たれた扉を指し示す。

「さあ、入るんだ」

雷電と紫電は扉をくぐった。扉は開け放たれたまま。

紫電は雷電に案内され、庁内にあるエレベーターに乗った。

最深部には鳩川たち友愛教団軍がいた。

最深部は広大な部屋だった。普通の家ならば五つは入りそうな空間である。天井は地面から十メートル以上離れている。

そして何より特徴的なのは地面以外の部屋自体が全て機械で作られていることだ。人間の臭いを一切感じさせない。その空間に『クイーン』は佇んでいた。周囲には機械兵は一体もない。

「追い詰めたぞ、『クイーン』。ボクの愛の前に滅びるのだ」

鳩川は上等なスーツ姿で戦場に来ていた。五人の兵士たちはマシンガンの世界最高の電子頭脳に向けている。

「愚カナ……鳩川紀夫、後ロヲ見ナサイ」

鳩川の後ろにある扉から紫電と雷電が現れた。

「ほう、確かに鳩川がいるな。それに……」

紫電は二つの瞳で部屋の奥に佇む物体を見た。

人の頭大の大きさで、脳みその形をしている。それはフラスコの中で緑色の培養液に浸されており、一定の間隔で鼓動していた。フラスコには十本程度のコードが繋がれている。

「俺の獲物もいるようだ」

ありったけの殺意を込めて口を開く。

「俺は紫電。最後の任務だ。貴様をこれから殺す」

「ハジメマシテ、ジャパニーズ……『羅生門』ノ最後ノ生き残りデスネ」

紫電は挨拶を済ませると、鳩川たちに目を向けた。

「だが『クイーン』を殺す前に貴様たちから斬るとしよう」

紫電は『戒正』を抜く。緑色に染まった刀身を相手に向けて構えた。

「雷電。邪魔ハシナイヨウニ」

電子頭脳は部下に指示を出す。

「はっ」

紫電は鳩川たちに詰め寄った。

「ぼ、ボクは地上を愛の樂園にするために立ち上がった友愛教団教主鳩川紀夫だぞ」

「知らん」

わたわたと子どものように鳩川は慌てる。

「邪魔な人間どもを一掃して愛のある優しい人間だけの世界を築くんだ。ボクならそれが出来るんだ」

紫電はそれを聞いて嘲笑う。

「貴様はそんなことが出来るとでも本気で思っているのか？」

「ボクはお前にも勝てる最強の軍隊を作っている。鳩川友愛研究所でね。これを量産すればお前なんて幼稚園児以下なんだあ！」

「それはアルティマティウムという物質だったな。体内に埋め込んだ人間の筋力や思考力、戦闘力を極限まで引き出すという」

「そうだ。これさえあればボクは人類を新しい愛の世界へと導いていける。愛だけの愛による愛の世界を」

「……貴様は人間全てが貴様の都合のいいようになるとでも思っているのか？ 貴様の友愛とかいう下らん妄想のためにどれだけの命を、どれだけの未来を奪ってきた？ どれだけ日本を潰し、民を虐げ……俺の戦友たちを殺してきた？」

「ボクの友愛革命のための生贄なんだ。犠牲が必要だったんだあ！」

「なら、貴様が最初に死ねばいい。それほどまでに生贄が必要というのならばな！」

紫電は一瞬にして鳩川たち全員を切り伏せていた。声を上げる暇すらなく、狙われた者達は地に伏せる。

全員が倒れているのを確認すると、『クイーン』に再び目を向けた。

「茶番は終わりだ。次は貴様だ」

「さすがに雑魚では傷ひとつ与えられないか」

雷電は微笑んで太刀を抜いた。

「偉大なる指導者を倒したくば、僕から倒すんだな」

「いいだろう。裏切り者を生かしておく道理もない」

第十九話：決戦（後書き）

こんばんは、Jokerです。
最終決戦開始です。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：決戦前夜

「グレン、マスター。頼みがある」

日本からの通信で紫電は言った。ここは日本軍名古屋基地である。

「すまないが、『ノア計画』が行われた場所を調べてもらいたい。

そこに何かがある可能性がある。『クイーン』は何らかの布石を置いている可能性が高い」

それだけ言う通信を終えた。

数日後、調査を終えたグレンから連絡が入る。

「そうか。地下に……があったか」

「ああ。『ノア計画』の起こった場所には全て」

「了解した。それがおそらく『クイーン』の最終的な狙いであり、人類への『復讐』なんだろう」

「えげつない復讐もあったもんだ」

「ヤツの経緯を考えれば当然かもしれんがな」

『経緯？』

「ヤツは元人間。クイーンⅡウィスタリアという天才科学者だったそう。肉体が滅びても頭脳が残れば、それを人類の栄華に利用しようと思っただけを残した。半永久的に」

『そんなことまで調べたのか』

「裏では結構有名な話だがな。まあいい。それで日本軍は『ノア計画』が起こった地点に向かわせる。その指揮も頼む」

「分かった。簡単な指示を出すだけでいいから引き受けよう」

「俺はこのまま直接対決へと持っていく。くれぐれも頼んだぞ」

『任せてくれ』

「……ありがとう。俺のような人間を信じ、これまで動いてくれて」

『おいおい、最後までいたいなと言うなよ』

「別にページが足りないから言ってるんじゃない。それだけ危険な任務だということだ」

『根も葉もない言い方だな。おっと、忘れてた。別口の依頼の報告だが……』

「聞こう」

紫電はメモ帳を取り出した。

『やはり、クイーンⅡウィスタリアは白が好みだったようだ。パンツの色じゃないぞ』

「……アホか。分かっている。黒色をなぜか嫌っていたということだな」

さらさらとメモ帳に書き綴る。

『ああ』

「礼を言う。これで……終わりに出来るかもしれん」

紫電はペンを置いた。

『終わりにしようぜ。大戦も、悪夢も』

「ああ」

電話を切った。

「すぐ、楽にしてやるぞ」

殺意のない声で呟くと、紫電は部屋から出て行った。

番外編：決戦前夜（後書き）

こんにちは、今日は休みをとりました。

といっても家で仕事なんですけどね（とほほ）

これは紫電が決戦に行く前の話です。

短いですが、これにも伏線張ってあります。

誤爆しないようにしなければ（笑）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第二十話…激戦

紫電は刀を一度下ろした。

「雷電。貴様に頼みがある。この友愛狂どもを庁外にいるグレンという男に引き渡してもらいたい」

「なぜだ？」

「俺はこいつらを殺すほど下衆な刃は持ち合わせていない。こいつらは法によって裁かれるのがいいさ」

「当初殺ソウトシテイタハズデスガ、マアイイデシヨウ」

雷電は『クイーン』の許可を得ると、機械兵を呼んで六人を運び出し始める。

「何故慈悲ヲカケタノデスカ」

「さてな」

「……私ノ目的モ理解シテオラレルノデスカ？」

「さてな。いずれにせよ、貴様はここで終わりだ」

『クイーン』は穏やかな言葉で紫電に話しかけた。

「アナタヲ見テイルト、昔話ヲ思イ出シマス。『種蒔く者』トイウ物語ヲ」

「そうか」

「アナタガ私ニトツテノ『種蒔く者』ニナリウルコトヲ期待シテイマスヨ」

雷電が運搬を終えて戻ってきた。

「雷電、ゴ苦労デシタ」

「とんでもございません」

紫電は待っていたように刀を構えた。

「さて、用事は済んだ。これから貴様らを滅ぼす」

かつての同僚は刃を抜いて、向かい合った。

一言も発しない。

しんと張り詰めた空気だけがそこに存在した。

「紫電」

「何だ、命乞いでもするか？」

「いいや」

雷電は澄み切った黒い瞳を紫電に向けた。かつてのような濁りはない。

「僕は雷電。通称『零』コピープロトタイプ。いざ、参る」

「そうか。貴様が師匠のクローンプロトタイプだったか。太刀筋が道理で似ていると思った」

言葉を交わしながら、二人は刃を交える。目にもとまらぬ速さで移動しながら、的確に相手の急所を狙いながら。

勝負は数時間経ってもまだ決着がつかない。紫電は攻めながら守り、雷電は守りながら攻めている。

やがて二人は肩で息をし始めた。額には汗がうつすらと現れる。

「そろそろ、幕と行くか」

「そうだね。君と遊ぶのは楽しいけど。これ以上遊んであげる時間はないんだ。他勢力もジェノヴァに来ているから倒さないといけないからね」

二人は距離をとった。

そして同時に姿を消す。

刃と刃がぶつかる音と空間を駆け巡る音だけが響く。

数度の激突の後、二つの刃は折れた。

同時に二人は姿を現した。

「勝負あったな」

雷電は地に伏せていた。

「楽にしてやる。死ね」

紫電は折れた刃を地面から引き抜く。刃を握んだ手からは血が流れる。

「何故だ。最強の暗殺者『零』のコピープロトタイプの僕が何故敗れる……？」

雷電はよろよろと立ち上がった。

「貴様に信念がないからさ」

「何だと？」

「貴様は何のために戦う？　そこにいる脳みそのためか？」

「そうだ。偉大なる指導者に従えば栄華が約束される。それが最良の選択なんだ」

「……貴様は操られるだけのマリオネットか。自分で考え動く。己の道は己で切り開く。そんな意志は貴様にはないのか。少なくとも、オリジナルの師匠にはあったぞ」

雷電は折れた刀を拾った。

「言っただろ。僕は信じられないのさ。自分も、この世界も」

「俺だって同じだ。師匠がいなくなってから、常に迷っていた。これでいいのか、これでよかったのかと何度も何度も自分に問いかけた。そして、逡巡の末に答えを出した。それがこれだ」

雷電は力なく笑った。

「君は、やはり強いな」

「強いわけではない。強くあろうとしているだけだ」

「それが強いのか」

紫電は刀を一旦鞘に収める。

「問答は終わりだ。そこをどくか、くたばるか。五秒くれてやるから選べ」

再び、紫電は刀をかつての友に向けた。

第二十話：激戦（後書き）

こんばんは、Jokerです。

あと数話で終了です。

もう少しお付き合いください。

というわけで

次回またお会いできることを祈りつつ……

第二十一話：ゼロ

「どく気はないよ」

刀を地に突き立てて、杖代わりにしながら雷電は震える足で立ち上がった。

「……それもよからう」

紫電は再度刀を構える。

「構えろ、雷電」

雷電も刀を構える。

「いくぞ！」

二人の声が同時に響いた。そして二人は獲物に向かって駆け出した。

激突の瞬間、一瞬緑色の光が煌く。それが消える頃には勝負はついていた。

「……終わりだ」

雷電は赤色に染まり、仰向けに倒れている。胴には深い傷が描かれていた。

「やっぱ、り……敵わないか」

口からおびただしい血を吐く。

「紫電、は……何故そこまで己を信じる、ことが、出来る？ 僕は、これまで『クイーン』の、ためにしか動けなかった」

紫電は刀を納めて答えた。

「俺を救えるのは俺だけだ。俺の問いに答えられるのも俺だけだ。ただそれだけのこと」

「はは、だから僕は……負けたのか。オリジナル零の技、も形無しだ」

紫電は必死に呼吸をする雷電に近づいた。

「だが、貴様が『考えて』技と信念を磨いていれば……俺は貴様に負けていたかもしれん。技のキレは貴様には及ばないだろう」

雷電は苦しそうに息を吐いた。

「ど、うかな」

「戦友が言うんだ、間違いない」

「さ、て。お別れ、だね」

息も絶え絶えになってきている。

「ああ。安らかに眠れ」

紫電は雷電から離れる。数秒間祈ると、背を向けて歩き出した。

「さ、よ……う……な……種蒔く……」

最期の言葉を吐くと、雷電は少しでも微笑んで眠った。

庁外では鳩川が拘束されて、護送されていた。

「ぼぼぼぼ、ボクちゃんに何をするんだあ！　ボクは友愛帝国皇帝はとかわのりおだぞお！」

グレンはしかめ面している。

「マスター、何でこんなヤツが日本の首相してたんですかね」

「知らんよ。選んだ国民に聞いてくれ」

「ボクの愛を受け入れるんだ。そしたら友愛の世界へ旅立つことが出来るんだぞお！」

「うるさい。日本まで送ってやるから裁かれろ。後は知らん」

グレンとマスターは鳩川を空港まで送り、日本軍に引き渡した。

「ボクは無罪だあ！　脱税も何もかも選んだ国民が悪いんだあ！」

ボクは愛の伝道師はとかわのりお六十三歳だぞ！　ママー！！！！
グレンとマスターは苦笑いしながら、泣き喚く六十三歳児を見送った。

「紫電の方もうまくいけばいいんですけどね」

「大丈夫。あの若者に心配はいらぬよ」

疲れた表情で二人は空港を後にした。空は快晴。争いが続く混沌の大地にいるとは思えない風景だった。

紫電は『クイーン』に向き合った。

「紫電、マサカココマデヤルトハ思イマセンデシタ」

「ゴタクは聞き飽きた。始末する」

脳みそしかなくなった天才科学者に向かって、紫電は歩いていく。

その手には『戒正』を握り締めていた。

「すべての元凶、とはいうまい。人類が選んだ道でもある。しかし、大戦を起こし、俺たちを滅ぼそうとしたことは許せん」

「サスガじゃばに―ずダケアリマスネ。アノ時滅ボシテオケバヨカッタノデシヨウカ」

「問答をするために来たわけではない。……俺は貴様を殺すためだけに来た」

感情が感じられない電子音声はなおも続く。

「紫電、疑問ニ思イマセンカ？ 何故私ガ『のあ計画』ヲ行ツタノカ」

「……」

紫電は沈黙で答える。

「アノ計画ニハモウ一ツ隠サレタモノガアツタノデスカラ」

電子音声は続けた。

「紫電、ココニハ誰モイマセン。ダカラコソ、教エテアゲマシヨウ。我が計画ハゼロニ帰ルコトヲ目的トシテ当初カラ作ラレタモノダッタノデス」

「ゼロに帰る、だと？」

「最モ純粹デ最モ自然ナ形ハドンナ形ダト思イマスカ？ ソレハゼロデス。私ハアナタガ鳩川ヤ雷電ヲ倒シ、ココマデ来ルコトヲ予見シ、ココニ最後ノ策ヲ入レマシタ」

『クイーン』が喋り終わると、轟音が鳴り響いた。

第二十一話：ゼロ（後書き）

こんにちは、Jokerです。

今日で修正した三話分をアップする予定です。出来れば。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第二十二話：選択

派手な爆音が響き、轟音とともに教皇庁は崩れ始めていた。壁に大きな亀裂が走る。

「……自殺でもするつもりか」

「イイエ」

「俺を殺すためか？」

「イイエ」

「では何のために？」

「ゼロへ帰ルタメニ」

紫電にグレンから通信が入った。

『紫電、ノア計画が行われた地点の地下核兵器が作動しはじめた。全部が発動すれば地球ごと吹き飛ばしかねない！』

「これが貴様の計画とやらか」

「ソウデス。私ヲ必要トスル世界ナド消エテシマエバイイ」

「狂ったか？」

「イイエ。人類ヲ滅ボスノハ人類ダトイウ真理ニタドリ着イタダケデス。他ノ何デモナイ。人ヲ消スノハ人ノ定メナノデス」

紫電は目を細めた。

「そうかもしれん。確かに貴様の言うように人間は愚かで欺瞞に満ちていて、貪欲で……それこそ貴様からすれば救い様がないのかもしれない。だが、人間を辞めた貴様に人間として俺が言っておいてやる。たとえ、滅亡が定めだとしても、俺たちはその定めとかいうヤツにさえ逆らうだろう。それが人間の強さだ」

「ソレコソ欺瞞デス」

「どうだかな。それを示すのはこれからの人類の歴史だ。貴様ではない」

紫電は刀を振り上げた。

「おしゃべりはここまです。貴様を殺せば全て片付く」

「ソウデスカ。アナタノ仲間ガセツカク知ラセテクレタモノヲ無駄ニスルトイウノデスカ」

「何のことだ？」

「私ニコレ以上刃ヲ向ケレバ『のあ計画』デ配置シタ全テノ核兵器ヲ作動サセテ地球ヲ滅ボシマス。人質ハ人類全員」

紫電は刀を背中の鞘に収める。

唇は少し震えていた。

「ヨイ選択デス」

「ふん」

「折角デスカラ、アナタニモ勝機ヲアゲマシヨウ」

『クイーン』は五つのボタンを出した。

「コノ内、一ツダケ核兵器ヲメラレルぼたんガアリマス。ソレヲ押セバアナタノ勝ちデス」

「この圧倒的に有利な状況を投げ出すか？」

「……」

「まあいい。貴様の狙いが何であろうと、道は一つしかなさそうだな。ならば、その賭けにのってやる」

教皇庁の崩落はどんどん進む。

庭園から見える建物は半壊し、なおも加速して崩壊し続ける。

「アト、十分モスレバ完全ニ倒壊スルデシヨウ。時間ハソレマデデス」

「そんなに貴様は嬉しいか？」

「ハイ？」

「貴様は先ほどから嬉しそうだな。このままでは貴様の腐った脳みそごと潰れて死ぬ。そんなに死ぬのが嬉しいか？」

答えはなかった。

紫電と『クイーン』の間に巨大なコンクリートの塊が降ってきた。さらに大小のコンクリートががらりと落ちてくる。

紫電と『クイーン』の間の空間が埋まっていった。

「コレデ、斬撃を放ツコトハ出来マセンネ」

「ふん。それならそれで手はある」

紫電が手榴弾を取り出した。

「待てよ。俺を差し置いてるんじゃないやねえ」

予期せぬ来訪者が崩れ落ちる部屋に現れる。

第二十二話：選択（後書き）

今日二つ目です。

ではまた最終回にて。

第二十三話：終結

そこには燃えるような髪を持つ青年がいた。手には得物の銃を持っている。

「ジョーカーか。何しに来た？」

紫電が低い声で言う、それに答える。

「世界が変わる場面を見に来た、とでも言っておこうか」

「……邪魔だ。消えうせろ」

「そう言われて引き下がるとでも思うか？」

「くだらん」

紫電は受け取った五つのボタンを見た。

赤、青、緑、黒そして白の五つの色がボタンに塗られている。

「サア、ドレヲ選ビマスカ？ 正解ハ一ツダケ。残リは核ノ起爆装置デス」

「急かさずとも選んでやる」

紫電は迷わず黒のボタンを押した。

しばらくの静寂が場を支配する。

「……偶然デショウカ。トリアエズ、地球消滅ダケハ回避シタヨウデスネ」

「とつくに調べはついていた。貴様はこの世界を憎んでいる。憎い人類^{もの}を破滅させたいと考えているのだろう。それを逆手にとって、自らの嫌いな色を選ばないように仕組んだのだろうが。さて、そろそろ幕といこうか」

部屋の崩壊はまだ加速し続ける。無機質な地面が大きく揺れ始めた。

「地球ハ守ラレヨウトモ、アナタハ守レハシマセンヨ。紫電」

「構わん。俺は人を殺めすぎた。今更己の身など省みてはいない」
あくまで静かに、淡々と紫電は喋る。

「俺は俺の任務さえこなせばいい。そして、それが俺の願いだ」

「アナタノヨウニ、考エル『人類』ガコレカラ必要ナノカモシレマセンネ。今マデハ、てれびやますこみニ思考ヲ預ケル人間バカリデシタカラ」

「喋りすぎたようだな」

「私ノ負けデハアリマセン。引き分ケデスネ」

「いや、アンタの負けだよ」

ジョーカーは瓦礫の間隙を縫って『クイーン』を的確に撃ち抜いた。

培養液がだらだらとこぼれ、機械化された脳みそが崩れ落ちていく。

「ガガガ……じょー……カーデシタカ。コンナコトヲシテモ無駄……無……」

「うるせえよ、脳みそが。人間様の意地を見せてやる！」

「私ノ……予測デ、ハ……脱出可能率……ぱー……んと」

「計算された可能性なんぞ、いくらでも変えることが出来る。過去は変えられないけど、未来は変えられるんだぜ？」

「……ガガ……精々、アガイテ……ク……」

「ジョーカー。そろそろ脱出だ」

「分かってるよ」

部屋はもう原型をとどめていない。

紫電とジョーカーはもうすぐ動かなくなる『クイーン』に背を向けて走り出した。

「トリアエズ……我が……イ……達成……。コレデ……眠り……。ル」

二人は教皇庁入り口目指して全力で走り続けた。

途中の落下物でいくつか傷を負った。

「もうすぐだな」

「気を抜くな。貴様が死にたくなければな」

その間にもまだ轟音と倒壊は続く。

紫電とジョーカーが入り口の前にたどり着いた瞬間、天井が全て崩れ落ちてきた。

「やべえ」

ジョーカーは立ち止まり、目を瞑った。

「とっとと走れ」

落ちてきた天井を両手で支えている紫電がいる。手からは血を流し、顔からは脂汗が出ている。

「すまない」

「口を開くな。走れ」

「アンタはどうするんだ？」

「俺はこれでいい。目的も果たした」

「生き延びろよ！ 死んで終わりなんて認めねえからな！」

「人の心配をしている暇があったら、とっとと貴様は走れ」

口調に力がない。

「……恩に着る」

ジョーカーは一瞬だけ振り向くと入り口に向かって駆け出した。

そして、ジョーカーが教皇庁から出た瞬間、建物は完全に倒壊した。

第二十三話：終結（後書き）

こんばんは、Jokerです。

今日は買い物に行って来ました。

これで第一部『種蒔く者』は完結です。

まだエピローグありますが。

長い話にお付き合いくださり、ありがとうございました。

ではエピローグにて。

エピローグ

『クイーン』消滅事件から数ヶ月が経った。

人類は『クイーン』に頼らない生き方をするのを余儀なくされたのである。

自ら考え、自ら行動する。人間にとって、これほど難しいことはないのだろう。

たとえるなら、答えのない問いを延々と解き続けることに似た苦しみがある。出した答えが本当に正解なのか、間違いなのか分からない。それでも出した答えに頷いて進むには勇気がある。だからこそ人間は不安に陥る。

誰かの言う通りに動いていれば、楽に生きることが出来たはず。そんな考えの人間の中にはいただろう。

それでも、人類は自らの頭で考え、自らの足で歩いていくことを選んだ。

荒廃した世界を、大戦で疲弊した世界を立て直すべく、人類はまた一步一步歩いていく。

事件の後、紫電を見た者はいなかった。

『クイーン』との一騎打ちで死んだと考える者。今も生き延びてどこかで暗殺稼業をしていると考える者。様々な者が紫電のその後を追ったが、行方は遥として知れない。

唯一ジョーカーだけは紫電の最後を見ていた。

崩れ落ちた天井を一人で支え、仲間じぶんを助けた姿を。

マスターとグレンはジョーカーに紫電の行方を尋ねたが、ジョーカーは全くそれに答えず、去っていった。紫電を超えてみせるとだけ言い残して。

事件は風化せずに後世に語り継がれていった。

人類が人類の歴史を人類以外に委ねた未曾有の愚かな事件として、事件を語る中で紫電の存在も語られ、彼は昔話と聖書に喩えられて『種蒔く者』と呼ばれるようになった。

『種蒔く者』は人類が再び自ら歩くための種を蒔いたのだ、と。のぞみ

事件から一年後、ドイツに一人の青年が現れた。

黒の総髪、獣のように鋭い瞳。背中には忍者刀。そして、今は誰も知らない暗殺組織の蒼い忍び装束を纏った青年だった。

青年は『ギルド』と書かれた二階建ての建物に入る。そして、受付の娘に言った。

「ここで仕事があると聞いた。手っ取り早く話してもらいたい」
青年の額には大きな傷がある。両手にも。

青年は娘から名前を聞かれ、少し逡巡した後こう答えた。

「俺は……アカツキ暁。ジャパニーズだ」

エピローグ（後書き）

こんばんは、Jokerです。

これで第一部完結です。

皆様、お読みいただきありがとうございました。

第二部『影追う者』もよろしければ是非読んでください！

ネタバレなど諸々は活動報告にて。

ではまた次回作でお会いできることを祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3056/>

種蒔く者

2010年10月8日14時28分発行